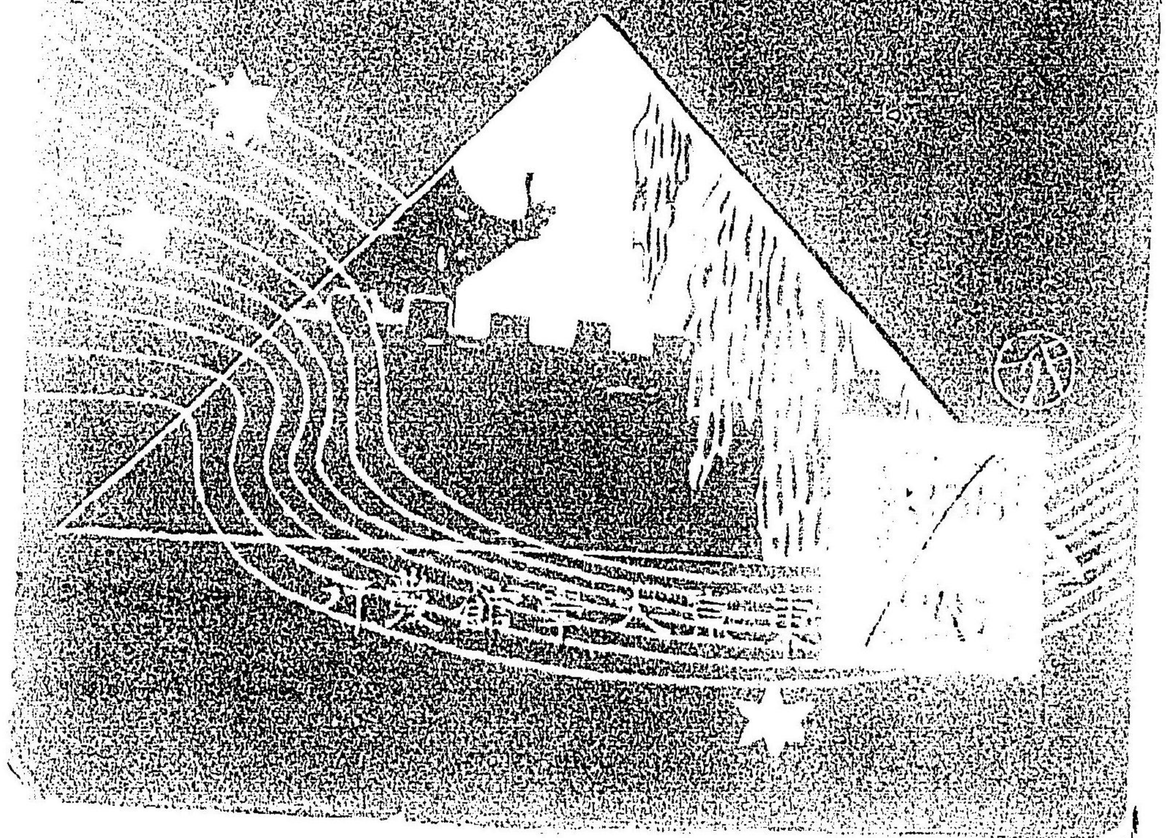
教育委員会

小

人友館



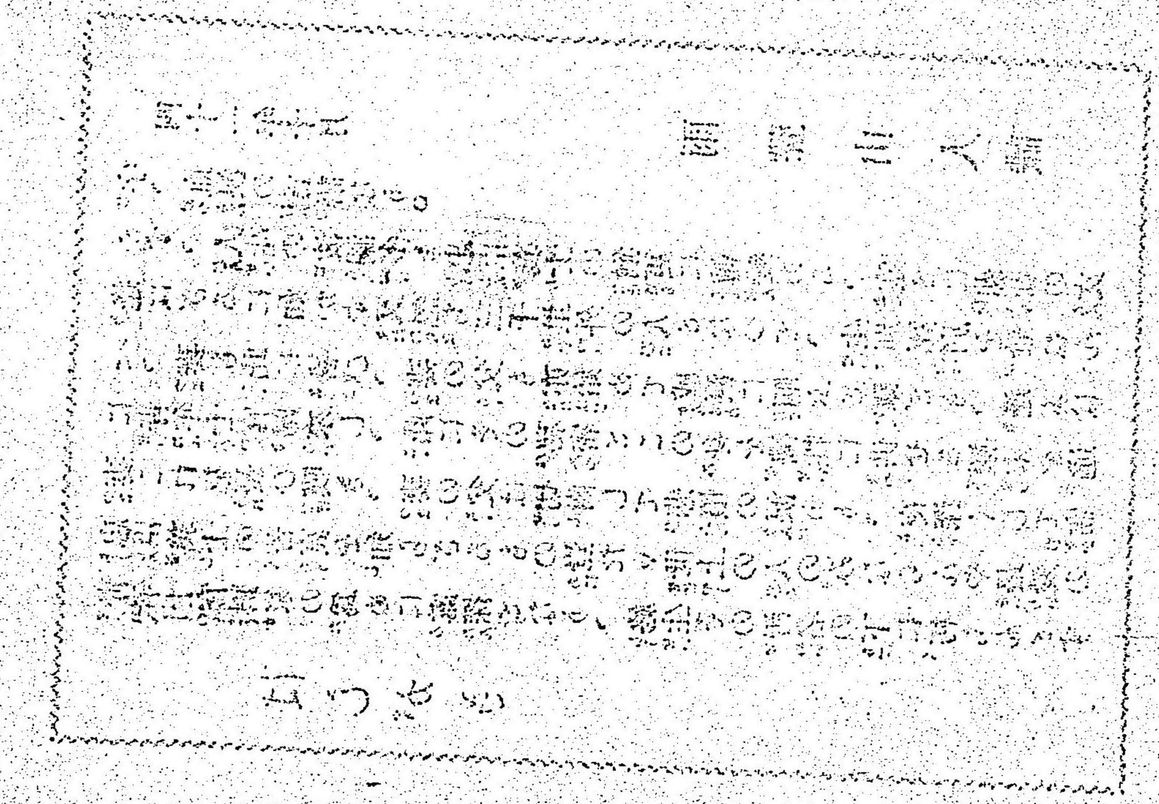
はしがき

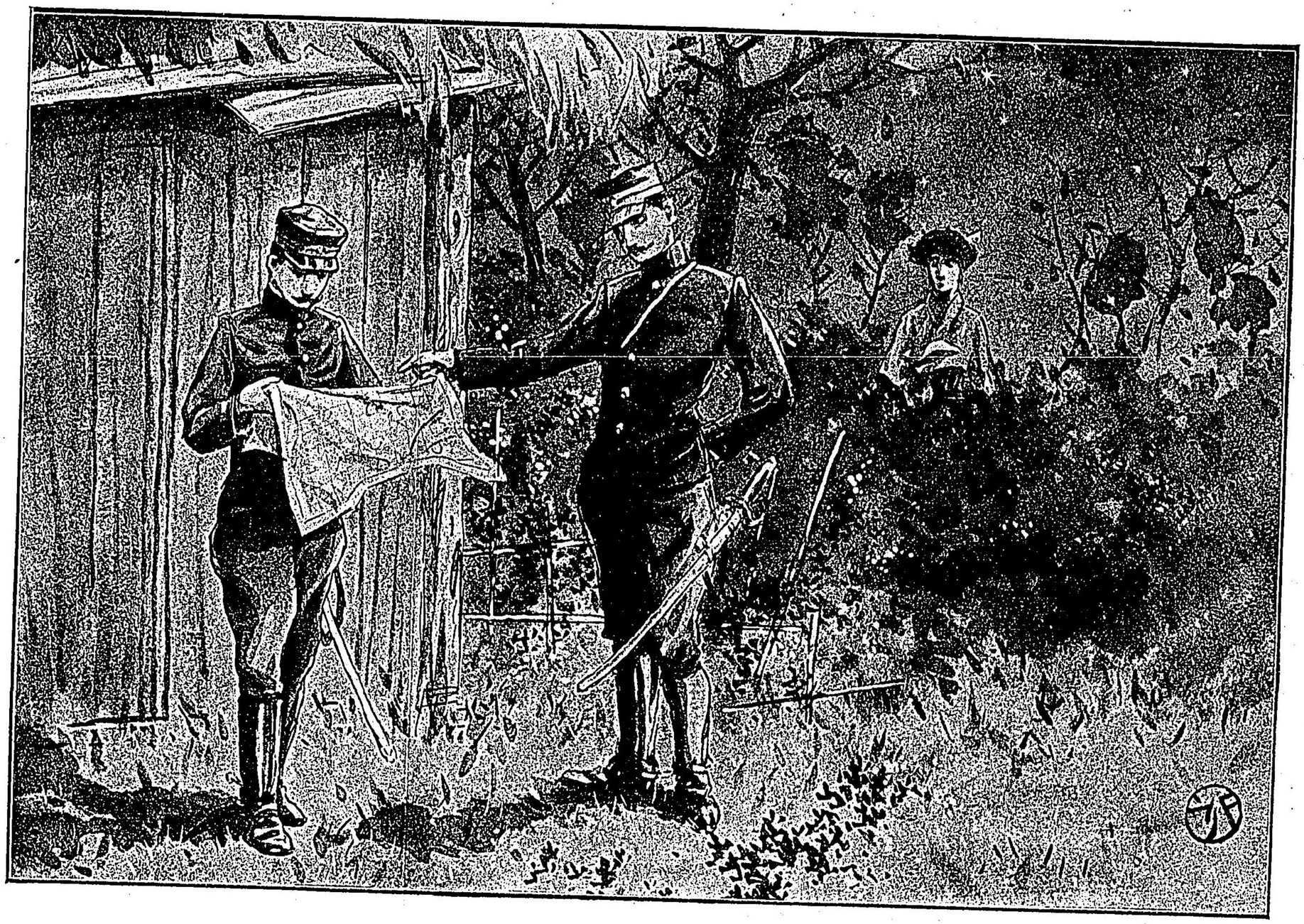
青年、官國家の爲めに露探となり、終生その汚名の下に朽ちんとす忠臣義士の苦衷を知らざるもの豈たゞ世上の人のみならんや最愛の妻こゝに嘆び嘆き、妻の父は切齒して悲憤の涙あり、夜深くして窃に青年士官歸來し、此にその秘密とこの身を犧牲に供せる顚末を述べ、妻も此に喜び、妻の父も亦始めて感涙に咽ぶと雖ども、逢ふは逢はざるに如かず又忽ち三千里外の人となつて、生別死別を兼ねんとす、人生の波瀾多き忠臣義士の猶更に轉變ある、寔とに悲壯の文字、血涙の言語なり。

四十一年十月

雨聲山人識

明治
4 11 3
内交





特71
859

小説　謀反人

井上雲嶺　著

相州三浦半島の一角、浦賀町より東南へ半里餘、春なほ淺き内川村の黄昏時を、武山の裾緩斜に蜒る畑地を前に、一段小高き中腹の丘に立つて、見渡せば縹渺たる太平洋を右に、横ざまに走る浦賀の町並を隔てゝ、彼所觀音崎の砲臺と思はるゝ方を片手に握りし雙眼鏡眼より離さず、一心不亂に眺め入る一人の青年がある、年齢二十八九、脊丈高く肉締り見るから逞しき筋骨は鬼とも組まんずばかり海水に燒けてか顔の色他くまで黑く、鼻下の八字髭更に威嚴を添へて、譬はゞ熊を負ふて立つ猛

虎の姿である。

此の青年、その名を駒井貫一といふ、彼は士官學校出身の歩兵中尉であるが、天性の剛直は宴會の席に端なくも上官の憤怒を買ひ、下級者の悲しさには、抗抵干犯の所業なりとして、遂に休職の已むなき嚴命を受けて以來、鄉里なる此の地に三年の春を迎ふるのである。

中尉幼にして父母を失ひ、養育の恩ある一人の伯父は、北清の役に大隊長として名譽の戰死を遂げ、彼は茲に漸く天下孤獨の數に入つたのであるが、父祖より傳はる田地も、その監督が面倒なりとて賣り拂ひ、在職の當時己が從卒たりし、今は豫備上等兵なる村山春吉といふが、不思議にも同じ此の村のものであつて、中尉の不幸なる運命に導かれて此の鄉土に歸るや、一番駈けに訪ね來こ慰めしのみか、まだ獨身なる中尉の不便を察して、食事萬端の世話をも引受けるべく誠意を捧げ呉れるので、固より籠の下を覗いたことのない身は、いはるゝまゝにその好意を容れて、そ

の家の裏手の、祖父母の隱居所であつたとかいふ森蔭に隱れた別房をさへ借り受けて、忠實なる春吉夫婦より主の如く侍かしつゝ、他人の眼からは不平あるが如く、またなきが如く、讀書の外は銃獵と釣魚に耽つて、缺さぬ職務とては、此も村人にはたゞ娯樂とばかりの、二十餘羽の鳩の飼育の其のみである。

中尉は今、鍛へし五體にはこの頃の寒氣も透らぬにや、胸寬げたる裾短の綿衣を素肌に被せて、毛脚二本滿潮送る夕風に拂はせつゝ、眞帆片帆の、波を渡る碧色に包まれゆく面白き景色には眼も呉れず、頻りに天の一方を眺めて居たが、軈て何者をか認めたらしく、双眼鏡の手眼より離れて莞爾と笑へば、彼方の空に塵かとばかりの鳥影浮かんで、矢よりも疾く飛び來と見る間に、一羽の白鳩は颯と身を飜らて、左手に黑む森蔭に下りた。

『ウン、愈よものになつたわい』

鳩の下るを見極めた中尉、獨り愉快げに點頭ひたが、軈て踵を回して、丘の小徑を

一歩、途端に下方から。

『中尉殿ッ、其所にお居でいしたか』

息喘き切つて登つて來たは、圓腰ながら歩兵上等兵の軍服を着けて、きび〳〵とした圓顔の壯丁、丘の頂上に達するや、直立して舉手注目の敬禮を施した、彼は村山春吉である。

中尉のその軍服に眼をつけたが、極めて嚴格なる語調、

『勤員令が下つたのか』

『ハイ、只今下りました』

春吉の全身には最早や勇氣が充ち滿ちて居るのであらう、言葉の尾に力が籠つて、武者顔ひが雙の肩に顯れて居る。

中尉は愈よ嚴肅の度を加へた。

『ヨシ、歸つて準備をせい、いふまでもないが、出發は二十四時間内だぞ』

『ハイ』

唯一言、春吉確實に答へて、踵を回すや丘を下へ逆落し、木の間隱れにひた走りの姿は既や道の迂曲りに消えた。

中尉はその後姿を熟と見送つたが、何故か遽に憂愁の色を浮かべた、思案に餘る徵證の腕をさへ組んだ。

何時か夕靄が四邊の景色を夢の樣に包んで、浦賀の升には既やちらほらと燈火の影

（二）

村の本道を西に外れて、南に開ひた田圃を前に、背後に風を遮る欝蒼とした杉林、栗の立木を柱の桔桿、其を繞つて、小川の呟き、早や恍惚〻眠つた樣な夕靄の中に燈火の影淡く搖ぐ茅葺屋根がある。

煤げた六疊の間に、對座の主人は駒井中尉、客は同じ年輩の、和服ながらも軍人と

いふは、変す言葉の調子に知れて、中尉とは同期の卒業なれど、今は大尉参謀として参謀本部の部員なる、要塞科の砲兵大尉掛札道生といふのである。

如何なることを語り来りけん、中尉は撫然たる様で、暫時瞑目沈思の人であつたが聽て、慨然として決心の色を顯した。

『掛札君、安心して呉れ玉へ、僕の今度の仕事は、全く次長閣下の知遇に感奮してやるので、區々たる名誉や金鵄勲章が欲しくてやるのぢアないから、先刻閣下から傳書鳩で寄された命令の端末にも、そのことが書いてあつたが、僕は最う閣下に會つて行く暇がないから、君からよく僕の決心を話して、閣下が安心される様にして呉れ玉へ』

『其は無論話すとも、併し閣下は例の一件を非常に心配して居られる様で、僕が今夜來たのも、訣別旁た、實はその内命を受けて來たのだ』

『例の一件とは？』

大尉は微笑を浮べた。

『浪子さんの一件よ』

『エッ』

中尉は驚きの眼を見張つたが、狼狽て追被せて、

『ぢア君から閣下へ話したのか』

『馬鹿なことをいひ玉へ、何で僕が其様なことを話すものか、併し考へて見玉へ、陸軍には憲兵が居るよ、閣下が君に大任を托さうといふに、素行位を知らんでどうするものか』

中尉はハタと小膝を打つた。

『左様か！、其所へは氣がつかなかつた、ア、いかん〳〵、僕は此様な迂濶漢ぢアないつもりだつたが、此様なことぢア大任を果せさうもないわい』

『其様なことがあるものか、誰でも自分のことには氣のつかんものさ、所で閣下は

其樣な關係になつて居るなら、式を擧るといふ暇もなからうから、せめてその兩親から、公然の許可だけでも受けて出發したらよからう、場合に依つては自分が媒酌人の位置に立つてもいゝから、といはれるのだが、どうだ君、僕もその方が心殘りがなくてよからうと思ふが』

聞くと等く、中尉は顏に苦悶の色を浮かべたが、其も瞬時、忽ち堅き決心の爲めに打消された樣、屹と形を正した。

『閣下の思召、君の友情、僕は實に難有く銘肝する、併し、僕は既に決心もし、また深く信じて居る所もあるから、此の事に就いては、閣下にも心配されん樣にいつて呉れ玉へ』

大尉は中尉の平素に深く信ずる所ある如く、

『左樣か』

一言鋭く、後は默して相手の顏を見守つたが、軈て、更に語を次いだ。

『思慮に富んだ君が左樣いふなら、この上は敢て勸めまい、何もいふまい、併し僕も、自分では君を親友と思つも居るのだから、知己と信じて居るのだから、支障えならば、その決心を聞かせて呉れないか、及ばずながら、君の後事には敢て當るつもりだ』

頭腦の冷靜を以つて第一の要素とする參謀官も、深く心に許す友の運命には、遑に情の動くのであらう、眼は何時か潤んだ、唇邊も乾いて居る、中尉は決心の深い爲めであらうか、反つて沈着の態度に復つた。

『其は無論話す、また後の事も君に頼むつもりだ、僕が決心したといふは外でもない、彼女はあのまゝにして行くつもりだ、また深く信じて居るといふのは、少し話しにくいことだが、僕は彼女の貞操を深く信じて居るのだ、閣下や君のいふ通り、僕も彼女の兩親から公然の許可を得て出發したいのは無論だが、愈よ僕が仕事にかゝつて、天下に賊名を歌はれて見玉へ、假令令結婚の式を擧げて置いた所で、當人

は兎に角、兩親がそのまゝにして置く氣遣ひはないからな、だから僕は、彼女の貞操に一任して置くより外に方法はあるまいと思ふんだ、就いては、彼女の母親の方は繼母ださうだから、僕が賊名を被つた曉には、さもなくてさへ不斷から僕との關係を甚く責めるさうだから、彼女が貞操を破らん以上、隨分苛酷なことをするだらうと思ふんだ、これは君なればこそ賴むのだが、その時は影ながら彼女の後援になつてやつて呉れ玉へ、軍人らしくない未練の樣だが、僕の心にかゝるのは是だけだから』

中尉は語り了つて道首垂れた。

大尉に默して言葉の一々を胸に刻むかの風であつたが、突如として、

『駒井君ッ、僕は最う何もいはん、金鵄勳章が貰えるでもなく、立てた功績が社會に知られるでもなく、剩へ棺を覆ふて猶亂臣賊子の名を雪ぐことのならぬ、苦しい大任を一身に引受けて、代へるものなき最愛の戀人をまで、知己一朝の殊遇に換へんとする君の義膽、博浪の昔輕軻の意氣は知らんが、君が今日の意氣は、實に鬼神を避けしむるの慨がある、また、その君が深く信ずる細君ならば、假令天下擧つて君を亂臣賊子とするも、假令お母さんが如何なる虐待を加へるとも、君の爲めに松柏の節を守り、君の爲めに地獄の呵責を忍ばるゝであらう、併しまた僕も、君が信任して後事を托して呉れるからには、無論其樣な必要はあるまいけれど、萬一の時は飽くまで浪子さんの後援になるから、日本軍隊の爲め、後の心配は無用にして呉れ玉へ』

激越の言葉は自ら堅くるしくもなる。

中尉は感謝の色を浮べた。

『難有う、左樣いつて呉れるのが何よりの餞別だ』

『オ、、いはれて思ひ出したが、閣下からの餞別を持つてきた』

いひつゝ傍なる細長の包みを解けば、長江燦として流るゝ一振の軍刀。

『是は國次ださうだが、出來も可なりの樣だ』

『左樣か、これは難有い！』

中尉は鞘を拂つて、一通り燦々たる燒刃を眺めたが、一振りビユウと片手擊に空を斬つて、

『丁度手ごろだな、併し僕が此刀を使ふ樣では、付務は遂げられないんだからなア其を思ふと、矢張り線列隊の奴等が羨ましいよ』

さも〳〵どかしさうに腕を顫はして、またも一閃、この度は飛びか〳〵りざま、向ひの柱へ斬りつけた、柱は見事眞二つ、斜に食ひ違つて鴨居の下ること三寸。

『仲々斬れるわい』

小地よげの笑を漏して、下つた鴨居をぐいと仰げば、大尉はこれも愉快げに、

『見事々々、既にこの意氣あり、何ぞ前途の關々多きを憂んやだ』

兩人は時の移るも知らず顏に壯語を交ゆるのであつたが、大尉は軈て其と心づき、

形を正して、

『駒井君、何時まで居ても名殘は盡んから、最う失敬するとしやう、それにまた餘り遲くなつても妙であるまいから』

『左樣か、それぢア閣下にも宜くいつて呉れ玉へ』

『諾、左樣いふ、いふまでもないが任務の爲め身体に注意し玉へ』

『ア、難有う、君もお達者に』

軍人の動作は何事にも速く、大尉は既や庭へ下りて二三歩々んだが、尋常一樣ならぬ此の……別、遺に分れ難い思ひのするのであらう、判然に見えぬ夜暗を隔てゝ振り向きながら。

『駒井君！』

『掛札君！』

夜暗の中にまた帽子を脱つて、大尉はずいと小川の土橋を渡つた。

樣端に立つ中尉は、姿の見えぬ夜暗を熟と見詰めたが、野面を渡つて來る夜風に煽られて、洋燈の火光前栽の梢に明滅するに心づき、ついと身を退いて座敷に入れば途端に隔ての襖の蔭より、我が足〻に轉び來る一塊の黑影、事の不意に驚かされつゝも、一歩退つて屹と身を搏ふれば、黑影と見ては是れ、戀人の浪子。

（三）

駒井中尉の戀人浪子、彼の家は單に此の内川村といはず、縣下有數の素封家として知られ、望まば縣會議員位の資格には事を缺かず、田地山林幾十町、酒庫米庫合はせて十幾戸前、家抱さへ祖先を問へば、由緒正しき戰國武士の歸農とやら、德川の流れを傳ふこと十三代今の主人藤右衛門に至つて家運愈よ榮え、名は平民でこそあれ、勢望おさ〳〵貴族に讓らず、高山の姓はあれと人是を呼ばず、たゞ村の名をそのまゝに内川村の庄屋樣ばかり、今も猶昔日のまゝの尊敬を受けつゝあるのである。

浪子此の家に千金の兒として生れ、今年十八の花の姿は村の若者が自慢の一つに上り、たゞ、一昨年の秋桐の一葉と共に、脆くも慈母に散り逝かれて、去年の雨多かりし夏の初め、群長殿の周旋で東京から嫁られた、兎角に我には辛き繼母の憂きはあれど、父の愛を一身に集めたる身は嬉しと思ふ日も多く、就中、我が家とは主從の關係ある春吉の家に、昨年の春より見染めたる駒井中尉と、嬉し恥かしき契りを結びてよりは、譬へば春の廣野の花に眠る胡蝶の如く、今此の生死も知れぬ悲しき袂別に眼覺るまでは、たゞ甘き蜜にも似たる溫かき愛に憧れて、世にも幸福なる初戀の霞に包まれて居たのである。

中尉は一目浪子の姿を見るより、道が愛着の覇絆に繫がれた態であつたが、遽に何者かの大事を思ひ浮べた樣、狼狽しく浪子の傍へ詰め寄り、早即の國次取つて居合腰、鯉口三寸鞘さへ滑らせた。

『浪子さんッ、貴嬢は何時頃此家へ來ました？』

何時にない荒々しい語氣、浪子思はず涙の顏を上れば、熟ト我を睨む形相の恐ろしさ、我知らず身を退いた。

『貴郎はまア』

餘りの意外に胸打れて、中尉の心を揺る由もなく、たゞ驚愕の眼を見張るのみであつたが、燈影に青き刄の光に忽ち其と讀んで、

『貴郎は、貴郎は妾をお殺し遊ばすおつもりですか』

中尉は今、殆ど眼中に人の影を映さず、

『次第に依つては殺さんとも限らんが、何時此處へ來たか、サ速ッ其をお言なさいッ』

『何時と申して、たつた今參つたばかりでございますが、丁度掛札樣がお立ちかゞの所でしたから、失禮ではございましたが、泣き顏をお眼にかけるが忌さに、裏口

から回つて參つたのでございます』

『たつた今！、確と其に相違ないですか』

『ハイ、妾が何で僞欺を申しましやう』

浪子は判然答へたが、怨めしいのは中尉の胸中である、さりとは妾を其樣な女と思召してか！

『モシ掛井樣、唯今指札樣とのお談話は、何樣な秘密のお談話かは存じませんが、秘密を漏す樣な女だと思召すなら、どうぞ其のお刀で殺して下さいまし、貴郎に其のお隔意がありますなら、妾は、妾は最う、最う死んで了つた方が、勝でございますッ』

崩れる身体を其のまゝ中尉の膝へ投げかけて、片手は涙、片手は刀の柄。

中尉は固より浪子の心を疑つてにはあらで、たゞ、軍機の爲めには親をも滅せん覺悟よりの詰問なれば今浪子の此の態度に依つて、我が秘密の談話の聞かれざりしを

確むると共に、仔細を知らぬ身には無理ならぬ邪推なる、我にありと思ふ隔意を、死を以つても除かんとする可憐の衷心を察しては、一入の不憫さ、五臓六腑も煮え返るのである、堪らず、刀に縋んだ浪子の手を確と握つた。

『浪子さん、貴嬢の其の覺悟、僕は實に嬉しいです、併し、僕に隔意がある様に思ふのは其は無理もない貴嬢の誤解で、僕も此の誤解を避る爲めに、仔細を打明けたいですが、是ばかりは軍の機密でどうしても、口外することが出來ないです、尚一歩進んでいへば、僕と掛札との間に秘密の談話があつたといふことが既に秘密です貴嬢始め普通人の眼からは、或は虚言の様に見ゐるかも知れませんが、軍機の大切なことは實に非常なもので、當事者の外は骨肉と雖も、決して漏すことは出來ないです、若し軍人が是を漏せば、事の大小に拘らず、戰時には死刑の嚴刑に處せらるゝです、故に軍人が一旦軍の機密に與つた以上は、假令如何に己の信用する人でも假令互に秘密のあるべき筈のない夫婦の間柄でも、是ばかりはゆめ口外することが

出來ないです、今僕が掛札との談話を聞かれはしまいかと思つて貴嬢を確めたのも皆な此の軍機を守る軍人の本分故なので、換言れば、日本軍の爲め、日本國の爲めなのですから、僕が貴嬢を秘密を守れる女として、打明けないのではないかといふ疑念は、貴嬢が今日まで僕を信じて下すつた信用で、同じく僕の此の言葉を信じて下すつた信用で、同じく僕の此の言葉を信じて、どうか奇麗に晴して下さい』

語り終つて中尉は、激した浪子の心を鎮めんとてか、優しくも其の背へ手をさへかけた、浪子の心は是で晴るだらうか。

斯ういはれては、何といひ返すことも出來ぬ、妾はまだ、何となく不安心の様な氣がするけれど、幾ら秘密な軍機とかでも、心を委せ合つた女房には、打明けてもよさゝうに思はれるけれど、妾しの誤解だといはれて了へば仕方がない、どうしても明かせぬとあつては是非もない、妾は無理にも疑念を晴さなければならぬ、併し、併し、

浪子は己が心を制しつゝも、まだ悔しい様な氣が失ぬのであらう、瞬く眼に霞む涙を紋綸子の手巾で拭きながら。

『妾は、足らない女の心から、ついお疑り申しまして、誠に申譯がございません。どうぞ御免遊ばして下さいまし』

手練手管は敢て女郎には限らぬ、女とさへ生れて來れば、年頃の血が湧いてさへ來れば、何様な時、何様な所でも、必ず一擧一動に隨いて回る、縱令自分から企まずとも、浪子は故意と判然いつて、他人々々しく中尉から離れやうとしたが、實を吐かせる手管に、拗て見せやうとしたが、不斷の痴話とは、譯が違ふ、良心が承知せぬ。

思へば今戰爭に行く夫、縱令自分の胸中が晴れ切らぬとも、假にも當てつけがましいことをいつては濟まぬ、況て、軍機とかいふものは、眞實左様したものかも知れぬものを、若し左様あれば、夫が今妾に對する心遣ひは、仲々妾の思つて居る様なものではあるまい、ア、妾は飛んだことをした、後へ心の殘らぬ様、潔くして出發せる筈の夫の門出に、慎みなげの此様なことをお耳に入れて！、エ、最う妾は……

……

口にこそいはがぬ、己を責る悔悟の涙の浪子は、またも夫の膝に身を顛ばした。

中尉は浪子の心を庭深く讀まんやうはなく、反つて判然とした、其の答に滿足した。

『では最う疑念が晴れましたか、其で僕も安心しました、所で動員令の下つたことは最う聞いたでしやうが、二十四時間内に出發しなければならんですから、僕は今から貴嬢のお父さんの所へお暇乞ひに參上つて、その足で直ぐ聯隊へ行くつもりです、就いては、軍人が戰爭に行くのは當然のことで、此のことは不斷から話してある通りですから、今更改めていふことはありませんが、だゝ一つ聞いて置いて貰いたいことがあるです』

た丶一つ！、是ぞ夫の大事の遺言、浪子思はず涙の顔を上げた、中尉もどうやら胸迫るらしい。

見上る浪子、見下す中尉、顔見合はすも今日限り！、永い別れにならうも知れぬ、遣りともない、成らば止めて欲い、不憫しい、せめて胸中を明したい、ならぬ、斷じてならぬ、中尉屹となつた。

『聞いて貰ひたいといふのは外でもないです、貴嬢と斯ういふ關係になつたのは、皆な軍人にあるまじき僕の不行跡から起つたことで、お父さんに對して申譯のないのは無論のこと、貴嬢にも今日のこの悲嘆をかける僕の胸中は、實にいふにいはれぬ苦痛を感じて居るですが、是は最う取返しのつかぬ、出來たこと丶諦めて戴いて斯うなつたからにはた丶、飽くまで佛を信じて貰ひたいです、本來ならば、是までの緣と諦めて呉れとか、他家へ嫁に行いて呉れとかいふのが、所謂る世間の義理といふものかも知れんが、僕には其がいへない、僕は何處までも貴嬢を方房と思つて

居ます、また、貴嬢も何時までも僕を夫と思つて居て下さるだらうと信じて居ますですから、戰爭に行つて、生還の期すべからざるは、是は別として、固より願ふことではないが、不幸にして死に勝る恥辱を被つて、敵の捕虜になるとか、力盡きて敵に降るとかして、天下の嗤笑を一身に集める樣な場合にも、尙僕は貴嬢を唯一の慰籍者として、心裡に無限の慰安を得らるゝだらうと思つて居るのですから、また公然の式こそ擧んが、お父さんも薄々は御承知の樣だし、貴嬢が今まで僕に盡して下すつた愛に僞りがなくば、どうか今後何時までも、永く其の愛を變ん樣にして、如何なる場合にも僕を信じて下さい、聞いて貰ひたいのは是だけです』

たゝ一つと前提した遺言は是か、是だけか、さりとはどうやら裏面がありさうだ、迂濶には合點が出來ぬ。

生還を願はぬ戰爭の門出の遺言としては、被仰る一通りに無理も見ぬが、さりとて、日頃のお氣質に似合はぬ言葉の節の耳に障らぬでもない見ればお顏色も平常と

は巽ふ、ハテ、掛札様との秘密の談話といひ、また其を聞きはせぬかと、お訊しなすつた彼の時の權幕といひ、妻にも明せぬ軍機とやらの中に、何か深い仔細があるのではあるまいか、若しや、彈丸の雨を潜つて働く外の、何か重い役をお受けなすつたのではあるまいか、敵の捕虜、敵へ降參、怪我にも其樣なことをなさるお氣質ではないが、曩日のお話に、敵の捕虜となつて降參したと見せて、敵方の樣子を探つて來る、間諜とかいふ、難しい役があると被仰つたこともある、オヽ、其よ、其の間諜の役をお勤めなさるに違ひない、また、大事なことを探るには、敵ばかりでなく、味方の者にも、眞實降參したと見せることもあるとか、掛札樣との秘密のお話は其に違ひない、其で何も箇も悉皆譯が分明る、其の時になつて妾の驚かぬ樣、其故で彼樣被仰つたのだ、左樣だ、愈よ其に違ひない、アヽ、同じ士官の數ある中で選まれて重い役を務めるは軍人の名譽、口にこそお出しなさらないが、さぞお嬉しいことであらう、妾も嬉しい、併し、併し、今度の戰爭は侮り難い露國を敵、聞く

上に、いはゝ虎の穴へ兒を取りに行く樣なもの、一つ違へば其限り！、アヽこれが悲しい袂別になりはしまいか、同じ命を投げ出してかゝる軍人でも、味方と一緒なら怪我も少からうに！、其を思ふと、選み出された夫の器量が情けない、妾といふものを遺して、死にゝ行く氣の夫が怨めしい、目出度く凱旋にさへなるなれば、郡長樣の威光を傘に、お父樣を無理に押し着けて、彼の惡らしい黑澤めを妾の婿にしやうといふ、意地惡なお母さんが日毎の難題も、何樣な辛い目をしてゝも、お歸りまでいひ抜けて居るけれど、若しも〳〵、これ限りになつたなら、妾は最う平常の身体ではなし、といつて、幾ら妾が貞操を貫徹さうと思つても、さうなつては尙更お母さんが承知なさるまいし、是はどうしても夫の身に怪我のない樣に、オヽ、今日は是非お話しなければならないのだが、此のお腹の中のことをお知らせ申したら、決してお働きの鈍る樣にと祈るではないが、少しは子の可愛さとやらで、身体を大切にして下さらうも知れぬ。

浪子は弱る心を頼みの綱で引立てた。

『駒井様、妾は最う貴郎の妻でございます、貴郎を信じないで、誰を頼りに致しましやう！、妾が貴郎の慰籍前なれば、貴郎は妾の慰籍者でございます、またお歸りまでには、もう一人慰籍者が増えますから、どうか其をお樂みに、お身体を大切に遊ばして、一日も速く日出度い凱旋をお待ち申します』

遁恥かしさに俯向きながらも、一生の智慧巧婦にいひ回した。

『ナニ、慰籍者が増る?!』

中尉は異みの眼を動かしたが、忽ち其の意を諒して、喜色滿面に溢れた。

『其では愈よ出來ましたか！、ア、難有い〳〵、天は僕に殊勳を立てさせやうといふのでしやう、而も出陣の際に聞くのは愈い吉祥です、實は、不幸にして僕が戰死すれば、駒井の血統が絶えて了ふと思つて、其ばかりが念頭に繫つて居ましたが、男にまれ女にまれ、僕の血を受けたものさへ出來て呉れゝば、最早や駒井の家の斷

絶する心配もなし、是でこそ思ふ存分の働きが出來ます、浪子さん、貴嬢も喜んで下さい、僕は此樣な嬉しいことはありません』

せめてもの頼みにと思つた此の子が却つて夫の死を輕からしむるとは！、軍人の精神とは左樣したものかは知らぬが、さりとは此の妾を何と思つて下さるのか、御自分獨り殊功をお立てなされば、後で女房の泣くのは關心はぬと思召すのか、エ、其なら、此樣なことをお知らせするではなかつたに！

浪子堪らずまた泣き伏た。

『最う〳〵其樣なことを被仰つて下さいますな、辛とのことで我慢して居ますのに此の上其樣なことを被仰られては、妾は最う、最う眞實に……』

後に歔欷り上る泣聲に亂されて言葉を成さない。

此の有樣に、中尉も遁いひ遁ぎたのを悔る体であつたが、此の時彼は忽として、更により大なる或ものに、思ひ到つたのでもあらか、浪子の言葉には答へんともせず

慨然として天を仰いだ。

麥隴三寸、風に戰ぐ田甫を隔てゝ、彼方に遠き村道を右に左に、螢と飛び交ふ提燈の火光は、動員令の下に馳せ集まる、我が子の爲め、我が夫の爲め、親戚故舊を呼び集へるべく、親や妻が走る其ではあるまいか。

(四)

遠く三國干渉の昔はいはずもがな、近く徹兵問題に對する露國の横暴に、不具戴天の怨恨を抱く國民は、優柔不斷なる内閣の爲めに、焦らして焦らし拔かれた後の今宣戰の詔勅に先立つ動員令の一檄を歡呼に迎へて、純忠なる愛國心は烈々たる敵愾心となつて燃え上つた、親ある者は親を忘れ、妻ある間は妻を捨て、鋤を投じ牙籌を碎いた幽萬の壯丁は、一意唯境國、八斗の意氣既に、彼得斯堡を壓するのであるが、この内川村の村役場にも、召集に應ずる壯丁十有五人と注せられた。

前代未聞の大戰爭、家の面目には一人半分の軍人を出したき願ひなれど、我運拙くして家に男子なければせめては、此の村より出征する人々を集めて、心ばかりなりと一盞の酒に武運、目出度きを祈り、また一つには、我が愛娘の婿と心に許す駒井中尉をも迎へて、其と明さず出陣の盃に托せ、互の願意の三世、固めさせたしといふが、今宵藤右衛門の胸に浮んだ急遽の願ひであつた。

何が扨て庄屋樣からのお招待、假令親子袂別の盃は措いても、旦那樣のお流れの盃を頂戴せでは、日頃の御恩の前に申譯なく、また其の樣な心掛けでは、殊功を立て〻歸るは愚、敵の流彈で犬死するが定のこと〻、何れも正直一途の親爺に追ひ立てられて、一人も缺かさず馳せ集まつた十五人お家重代の寶物とは聞き及ぶ、戰爭の門出の席には諦向きの、何とやらの銘もあるげなの鐵の兜、紫の服紗の色恭やしく据へて九尺の床を拂んで、十二疊の廣間も狹しと居並んだ有樣は、天晴れ勇士の出陣と見紿て、實に勇ましさの限りである。

固より火急の酒宴、珍味佳肴の數こそないが勇士に餞する誠意の底を汲んで、藤右衛門躬ら銚子を執つての盃は、席を回つて早や三行に及んだ。

旦那樣と呼ばれ何助と呼ぶは、其は鋤鍬とつた畑での挨拶、今斯く召集に應じて軍服を着けた以上は、四千餘萬の命の親と頼み日本の軍人、況て其が命を捨てに行く門出の酒宴、ゆめ粗略のない樣にと、家人を誡める前己先づ、袴紋服着用に及んだ藤右衛門、末座に着いて恭やしく頭を下げた。

『扨て皆さん、お呼び立て申して何の風情もありませんで、誠にお詫の致し樣もありません、併し御承知の通り、私には男の子がありませんので、今度の樣な國家の大事に際しても、一人もお役に立てることが出來ませんから、失禮ながら我が子の樣に思つて居る皆さん方にせめて、快く一口飲つて行つて戴いたなら、幾分か國家に盡すことに當るかとも存じまして、其故お暇のない御出發前をも顧ず、わざ〳〵御光來を願つた次第ですから、どうぞ御遠慮なくお過し下さいまし、また、是は申すまでもないことですが、――唯今お迎ひの者を出しましたから、最う直にお入來になるでしやうが、駒井さんを始めとして皆さん方十幾人といふ大勢の軍人を、此の小さな内川村から出すといふのは、此の村にとつて非常な名譽のことですから、どうか御銘々が立派な殊功をお立てなすつて、此の上にも村の名譽の揚る樣、大きくいへば、日本の武勇を世界に耀かす樣、存分のお働きのある樣に願ひます』

いひ了つて藤右衛門はまた一禮した。

四角四面の切り口上を眞向から浴せかけられて、森蔭から霰彈射擊を受けた程に面喰つた壯丁等は、たゞ互に顔を見合せて、挨拶の代表者を眼で讓り合ふのであつたが、軈て、軍服の袖章の一本多いのが飛が身の不祥となつて、十四に二を乘けて二十八の眼は、此の苦しい任務を一齊に上席の春吉に命じた、上等兵といへば、一伍の斥候には長たるの資格を缺かぬ春吉、敵前に進んでは、十人二十人ものゝ數とも思はぬが、假にも旦那樣と呼ぶ、人に頭を下げて出られては、遁に渡り合ふ勇氣が

出ないのである、一座は爲めに稍や白けた。

が、春吉の此の苦痛は、よし大なる苦痛に依つて救はれた。

この時遽しく襖を開けて、闖の外へ手をついたのは、駒井中尉を迎へに行つた下男の杢助老爺である、苦しさうな息を眞闇の肩に刻みながら。

『だ旦那様ッ、た大變でがす』

大變と聞かぬ前、先づ其の遽しさに眉を顰めた藤右衛門、ぐいと膝を捻つた。

『大變とは何だ？、駒井さんはどうなされた？、直にお入來下さるか、杢助、どうだ？』

疊みかける質問の矢を、杢助首で拂ひながら、

『どうも斯うもねえでがす、俺アはア、オッ魂消て了ひやした』

『何を魂消た？、速く話せ』

藤右衛門ばかりでない、一座の視線を一身に集めた杢助は、動悸の稍や鎭まると共に、漸く話の端緒を見出した、併し急には要領を得られさうもない。

『ハイお話し致しますべエ、旦那様のいはつしやつた通り、風呂の水も彼のまゝにして、直ぐ駒井様の所へおッ走つたでがす、するとお前様、途中で作兵衛に逢ましてのウ、汝何處へ行くだアと聞くでがすから』

藤右衛門とう〳〵癇癪を起した。

『エ、ッ自烈たい奴だ、作兵衛のことを聞くのではないわッ、馬鹿めッ』

杢助縮み上つた。

『へエ』

『へエではない、駒井さんは何と被仰つた？』

度膽を抜かれた杢助には最う話の筋も何もない。

『へエお留守でがした』

『ナニお留守？！、其樣な筈はないが、で春吉の家へ行つて聞いて見たか』

『其がでがす、お花さアに聞いて見たら分るべエと思つて、納屋の方から回つて行きやすと、オッ魂消るのオッ魂消ねえの段でねえでがす、赤え帽子のウ、被つた兵隊さんが、左様さ、十五人も居やしたかな、お花さんを取巻いて、甚え慇しいことをいつて居るでがす、俺ハアオッ恐くなりやしたから、窃つと歸るべエと思つて振り向くと、其の兵隊め、俺の顏見て、コラッと吐かしたぢアがアせんか、俺アはア捕まつちア堪んねえと思つたで、一生懸命に逃げて來たでがす』

要領を得ぬながらも、たゞ事ならずと思はるゝ杢助の言葉に、藤右衛門始め皆な眼を見合はせたが、是は襖の蔭から聞いて居たのであらう、酒の香に醉つて暫し席を退いて居た、模樣の裾に波うたす浪子の姿も再び現れて、怪みの雲は何れも眉を深く閉じした。

思案の藤右衛門曰、

『可し、部屋へ歸つて休め』

杢助を退かしめて、其の眼を春吉に向けた。

『春吉さん、杢助のいふことはさつぱり分らんが、駒井さんのお留守といふのも合點が行かんし、また兵隊が來てお花を取巻いて居るといふのも氣にかゝるから、御苦勞樣だが、一走り行つて見て來て下さらんか』

我に繼いて來るべき筈の中尉の留守といふも不思議、赤い帽子といへば、近衞兵か憲兵だが、何れにして我が家へ來る用はない筈、女房のお花を取巻いて居ると聞いては、人々の手前、我から進んではいひ出せぬが、行けとあるは渡りに舟、春吉は藤右衛門の聲に應じて立ち上つた。

『畏まりました』

春吉の家は田を一つ隔てたばかり、もの丶二町とはあるやなし、彼は一息に驅けつけた。

待つ身には一時間餘りにも思はれたらうが、時計の針で見て、丁度三十分を經過し

た。

不憫に、强ち杢助ばかりを咎むべきではなかつた、春吉は行く時の倍加の速度で歸つて來たが、顏の生氣は全然失て、最初に口を衝いて出る言葉は、矢張り杢助と同じことであつた。

『旦那樣、大變ですッ！』

二度の『大變』だから、愈よ大變に違いない、藤右衞門思はず膝を運めたが、最うさん附けなぞに拖泥つては居られない。

『春吉、どうした？、何が大變だ？』

息の喘れるばかりではない、春吉は泣いて居る。

『旦那樣ッ、悔しいッ、欺されたッ！』

『ナニ欺された？、誰に？』

春吉は拳も碎けよと壘を擊つて、

『己れッ、國賊ッ、賣國奴ッ』

『誰が國賊だ？、誰が賣國奴だ？、いはなくては分らんではないか、譯を聞かして呉れ、話して呉れ、そして駒井さんはどうなすつた？』

駒井と聞いて、春吉は更に身を悶えながら。

『そその、その駒井ですッ、その駒井中尉が國賊ですッ、賣國奴ですッ、露探ですッ』

『エ、ッ』

驚愕の聲は一座二十餘人の口から齊く響いた、そして、就中藤右衞門と浪子との兩人は、平常井駒中尉を信ずることが深いだけ、其だけ驚愕も甚い、藤右衞門は右から、浪子は左から、春吉を挾んで詰め寄つた、併し春吉の言葉を無論信じてゞはない。

『コレ春吉、手前は何をいふッ！』

『春吉、お前はまア！』

兩人が自分の言葉を信用して呉れないだけ、兩人がまだ駒井中尉を信用して居ると思ふだけ、尙更春吉は悔しい、彼は屹となつた。

『ハイ、何も申しません、お兩人樣を始め、私等一同が皆な、立派な軍人と信じて居た彼の駒井中尉は、聞くも忌はしい露探でございます、斯う申したばかりでは、虚言と思召すのも當然ですが、現に今憲兵隊から逮捕に來たのが、何よりの動かん證據です』

『エ、ッ、憲兵が、逮捕に？』

浪子の驚愕を春吉は更に抑へて、

『ハイ、浦賀の分隊から十五名の憲兵を派遣したのです、今家宅搜索をやつて居ますが、御當家との關係も知つて居る樣ですから、今に此家へも來るでございましう』

斯ういはれ見れば、杢助のいつたことも思ひ合はされて、最早や春吉の言葉を疑ふべき餘地がない、否でも應でも信用しない譯には行かぬ、愈よ左樣と決れば、我が可愛い娘の婿と心に許した、否、當人同志は最早や嬉しい契りを結んだらしい、彼の駒井中尉は國賊であつた、賣國奴であつた、露探であつた、最う取り返しはつかぬ、我が不注意から家名を汚した。

藤右衛門は默して垂首れたが、突如として口を開いた。

『して駒井さんは最う縛られたのか』

春吉は悔しさうに拳を握つて、

『所が殘念にも逃したのです』

藤右衛門はホッと息を漏した、浪子も顏を上げた、春吉言葉を續けて、

『僅か五分か十分だつたさうですが、憲兵の來る少し前に、急に出發しなければならなくなつたから、高山さんへも參上つて居る暇がないから、後で宜しくいつて呉

れといつて、匆々にして出て行つたさうです』

藤右衛門は無言、浪子は泣き伏して、最う正体がない、一座は白けて、中尉の噂をする者さへなくなつた、併し其は、中尉と浪子との關係を知つて居るからの遠慮で中尉が憎む　き露探であるといふことは、深く銘々の心に刻みつけられた、が、此の一座の中に、此の現象を冷笑で迎へながら、人知れず點頭き合ふ兩人があつた、其は浪子の繼母のお杉と、その甥で、今は村役場の書記を勤めて居る、名とは反對に少し薄野呂の、黒澤才二といふのとの兩人である。

軈て、目出度い出陣の祝宴に、飛んだ不祥の出來事であつたが、出來たことは今更仕方もなし、また、駒井中尉一人の爲めの祝宴といふでもなければ、緣起直しに席を更へて今一献、といふのが、義理一遍の藤右衛門の挨拶であつたが、折から鳴く一番雞の聲に、出發の時刻の近づくに驚かされて、滅入つた氣勇を萬歳の三唱で引立てながら、一同高山家の門を出た。

春吉の言葉に違はず、衆客が立ち去つてから間もなく、憲兵が來て藤右衛門と浪子とに訊問を加へた。

(五)

翌日から浪子は當然病人となつた、藤右衛門は村の義理、横須賀の停車場まで、出征兵子を見送りの列に力なく、加はつたが歸つて來ると同じく病人同樣、高山の家は全然滅入つて了つた。

無論昨夜一夜を泣き明し悶え明した後の今日浪子は己が部屋の四疊半に展べた寢床の上に、自分ながら癒て居るやら起きて居るやら、將た生き居るやら死んで居るやらも分らず、精も根も盡き果てた身体を投げ出して居たが、日光の加減か、障子のパッと明くなつたのに思はず誘はれて、一夜に窶れた顏を濡れた枕紙から離すと、眼につくものは、少時前まで胸に抱き締めて、恨み口説いた、情ない、さりとてま

た懐かしさのいや増す、駒井中尉の寫眞である、浪子寫眞手に取り上て繁々眺める
と、胸中の思ひはまた繰返す。
妾には幾らどう考へて見ても、駒井様が其様なことを被成らうとは思へない、不斷
からの彼の御氣性に、其様なことのあらう筈がない、どうしても虚言に違いない、
何かの間違ひに定つて居る、露探などとは口にするも汚らはしい、妾は彼の時、何
故いひ張らなかつたらう、大事の夫の恥辱を何故雪がなかつたらう、エ、悔しい、
不甲斐ない、何故妾は此様に意氣地がないだらう！、また春吉にしても、餘り輕卒
ではないか、幾ら憲兵が逮捕に來たからといつて、人違ひといふこともあれば、冤
罪といふこともある、況て、駒井様と妾とも關係も知つて居るではないか、その妾
は自分の主人筋ではないか、また自分は昔日駒井様の從卒であつたではないか、昔
日ばかりではない、昨日までは褒めて褒めて褒めちぎつて、三年以來のお世話をさ
へして居たではないか、其の駒井様が露探だなぞと、假令憲兵が何といはふと、毎

日お傍に居た者なら、其様なことをなさるお方か、お方でないか位は分りさうなも
のではないか、其を底事！、召集を受けて、如何に自分の心が狼狽へたればとて、
事柄も辨へず、一途に憲兵の言葉を眞に受けて、場所もあらうに彼の人中で、仕た
り顔に喋々と、エ、高慢らしい彼の時の顔容！、唾を吐きかけてやりたい、喰ひつ
いてやりたい、……　彼の時はたゞ夫の一大事と狼狽た爲め、お逃げな
すつたと聞いてホッと安心したが、思へば戰爭の門出、お逃げなすつたなぞとは緣
起でもない、五分か十分の爲めに逃がしたが殘念とか！、その五分十分は此方でこ
そ殘念、彼の時憲兵にお會ひなさりさへすれば、固より分りきつた間違ひ、一言の
御辯解で譯も分つたらうし、妾の此の苦痛もせずに濟んだらうに！、併し彼時から
直ぐ聯隊へお行でなすつたらうから、憲兵にはお會ひなさらずとも、聯隊の方でも
そのお話しがあつたらうし、お話しさへあれで直ぐ分ること、ヲヽ、今日も最う正
午、今頃は最う青天白日の身になつて被居るかも知れない、妾が心配する程のこと

はないかも知れない、知れないではないか其に相違ない、屹度其に相違ない、……

……、オ、昨日お別れ申す時に何と被仰つた？、忘れもしないまだ、耳に留つて居る、如何なる場合にも僕を信じて下さいと、仰つたではないか！そして、妾は立派にお受けをしたではないか！、その妾が此樣なことで、如何なる場合にも信じて居るといはれやうか、ハイと答へた舌の根のまだ乾かない中に、假にもお心の底を疑ふ樣では、信じて居るとはいはれまい！、ア、、駒井樣は妾を信じて下さればこそ、斯樣までいつて下さるのだらうに、妾を唯一の慰藉者とまでいつて下さるのだらうに、國賊、賣國奴、露探、失禮といはふか、不埒といはふか、忌はしさの極みの惡名を、他人の言葉の尻に乘つて、夫の名前の頭につけた妾は、馬鹿か狂人か人非人か！エ、、最う妾は妾が憎らしいッ。

亂れに亂れ拔いた頭腦で、到底正當なる判斷の下し得らるゝ筈がない、兎角に出たがる自分勝手の理屈を楯に、浪子は九死の苦痛の中に、一生の活路を無理に開いて

ホッと一息吐く間もなく、今度は悔悟の涙の雨に行き惱むのであつたが、邪慳の惡魔は纖弱い女の足に追ひ着いて、死ねよとばかり　またも呵責の鞭打を加へるのである、浪子の顏は見る〳〵血の氣を失つた。

併し、併し、彼の時のお言葉の中に、其の時も左樣思つたが、妙に聞ゑる節のないでもなかつた、今となると尙更思ひ合はされて氣にかゝる『不幸にして死に勝る恥辱を被つて、敵の捕虜になるとか、力盡きて敵に降るとかして、天下の嗟笑を一身に集める樣な場合にも、尙僕は貴孃を唯一の慰藉者として、心に無限の慰安を得らるゝだらうと思ひますからとの、お言葉、彼の時は身最負の考へやら、もしや、妻にも明せぬ秘密の役をお引受けなすつたのではあるまいか、敵も味方も欺す間諜にでもおなりなさるのではあるまいか、其故でそれとなく被仰つたのではあるまいかと思つても見たが、春吉のいつたこと、憲兵のいつたことを思ひ合して見ると、彼の時の御樣子といひ、彼のお言葉が眞實心からのお言葉で曲つた御了簡をお出しな

さつたのかも知れぬ、左様でないとはいひ切れぬ、すれば、駒井様は、妾の夫は、國賊ッ？、賣國奴ッ？、露探ッ？、アヽどうしやう、どうしたらよからうヽ、駒井様貴郎はまア！、……貴郎は日本の軍人ではありませんか、貴郎の伯父様も立派な、軍人で被居つたではありませんか、名譽の戰死を遊ばしたのでありませんか！、その貴郎が、何様な榮耀をなされるからかは存じませんが、國の賊、國を賣る露國の犬とまでおなりなさるとは、餘りな、餘りな情けない御了簡ではありませんか！、……どうせ其様な腐つたお心なら、今まで被仰つたことに眞實のお言葉はありますまいが、妾にだけ其となく側聞かして、社會からは笑はれても妾だけを慰藉者と思召すと被仰るのは矢張り妾を女房と思つて下さるのか、其ならば何故一言明しては下さらぬ、百姓でこそあれ、舊は帶刀御免の家に生れた妾決して見苦しいことは致しません、貴郎のお名の汚れぬ樣、お家の瑾の出來ぬ樣、女ながらも最後の一念、貴郎を、ご殺すのではありません、腐つた貴郎のお心に止刀

を刺して、その塲を去らず、因果な此の子、このお腹の中の胎兒諸共、妾もお伴を致しますッ、また恥も外聞も忘れ果てたお心では、こヽへお氣のつかぬも御尤ですが、後へ殘つた妾がこのまゝ生て居ると思召すか、國を賣つた駒井中尉の女房どしてなら知らぬこと、高山藤右衛門の娘の浪どしては、廣い世間が承知しません、この儘泣き死に死ぬば幸、死なねば自分で死にます、ハイ、死んでお目にかけます、母の筐の備前長船、確かに藏つてございますッ。

惡魔の打ち下す鐵鞭に、丁々發矢の響こそ聞えぬが、呵責に悶える浪子は氣も狂はしく、拭ひもやらぬ涙の顏に中尉の寫眞を押し當てヽ、死ねよ此の身、消ねよ我が魂と藻掻くのである。

仇なりし希望の光と共に、一時をパッと輝いた障子の日影も、西へ滑つて小窓の端に名殘を留め、枕頭の小机、床の妻琴、またも陰森の氣に罩められて、小暗き床側に白む寒梅一輪、風なきに枝を離れてはら〳〵と散つた。

折から靜かに開く襖の音、浪子思はず顏を上れば、胸に同じ思の結ばれてか、これも一夜に白髮の數の增えたらん樣の藤右衛門、力なげの膝を無言に折つた。

いはぬはいふに勝る苦痛とは是か、浪子の顏は袖の上、藤右衛門の眼は浪子の頸、春院寂として、窓外たゞ閑雀の聲を聞くのみであつたが、氣氣を傳つて響く互の心は、遂に先つ藤右衛門の口から聲となつた。

『お浪』

『お父樣』

浪子は堪へて居た悲しさを自分の聲で誘出して、耐らず欷歔り上げた、藤右衛門は眼を瞬くばかり、急には言葉を續け得なかつたが、軈て道に氣を引締めた。

『お浪、泣くか、泣かずには居られまい、俺も泣いた、併しお前は、駒井さんを何と思ふ？、先づ其を聞かして呉れ、何と思ふ、憲兵のいつた通り、矢張り駒井さんを露探と思ふか』

浪子は身を顏はした。

『コレお浪、俺に秘すことはないでは、お前と駒井さんとの關係を、知つて知らぬ振りをして居る俺の胸中は、お前にも分つて居るだらう、その俺に秘すには及ばんではないか』

父の胸中を知らぬではないが、露骨にいはれたは今が始めて、浪子道に顏を染め返した。

『ハイ、お秘し申しは致しません、したが申譯もない妾の不義、どうぞ御勘辨なつて下さいまし』

『ナニ不義？　オ、不義かも知れない、イヤ不義に違ひない、併し、俺はその不義を心で褒めて居る、まだ祝言こそさせないが、俺は最う駒井さんをお前の婿と定めて居る、假令お杉が何といはふが、駒井さんは最うお前の婿ぢや、他人はどう思ふか知らぬが、彼の風彩、彼の才略、高山の家の婿に取つて不足はあるまい、その婿

殿、その駒井さんが、事もあらうに露探だなどと、如何に間違のあらう筈のない憲兵の言葉でも、俺にはどうしても信用が出來ぬ、お浪、お前は何と思ふ？』

春吉の言葉、憲兵の言葉を信用して、大事の夫に惡名を被せて見たも、云はゞ道理に責められてのしやうことなし、一人半分心の强味をつけてくれる味方さへ出來れば、どうして、心の底の本音を吐かずに居られるものではない、併し是も父なればこそ！　可愛がつて下さる妾の夫なればこそ！　浪子はまた新に感謝の涙に咽んだ。

『ハイ、妾も……』

『ナニお前も左、左樣だらう！　左樣だらうとも、假にも駒井さんの氣質を知つた者に、露探？　馬鹿な！　其樣なことが過失にもいへるものでない、俺でさへ左樣思ふに、況てお前は、女房じやもの、親の許した夫婦じやもの、他人の言葉を迂濶に信じてなるものか、虚言じや、虚言じや、虚言に定つて居る、心配するな、今に憲兵の方から、間違ひだつたといつて來るに違ひない、駒井さんからも目出度く出

征したといふお手紙が來るに違ひない、コレ最う泣くな、不吉じや、泣くなといふに、それとも嬉し泣きか、彼程の夫を持つたが嬉しいか、軈て殊功を立てゝ歸つてござる妾が眼に映るか、オヽ、其ならば俺の眼にも見える、彼の力量才覺、今に立派な殊功を立てゝ、金鵄勳章を垂げて歸つてござるに定つて居る……エヽッ殘念な！、この智惠が昨夜出て呉れたなら、人中で彼の恥辱はかゝなんだものを！　また憲兵にも駒井さんの不斷の行狀をよく話して、今頃は最う間違ひだつたとの通知の手紙を握つて、今朝も横須賀からの歸途、其となく冷笑ひをつた、彼の郡長めの面へ叩きつけてやつたものを！、百姓の悲しさとはいへ、舊は帶刀御免の家に生れたものが、たゞ憲兵といふ一聲に縮み上つて、駒井さんの寃罪を雪ぎ得ぬのみか、お役人樣の被仰ることはと、いはれたことを鵜飲にして、頭から恐れ入つた意氣地なさ、腑甲斐なさ、お浪、お前も脇で見て居たらうが、俺は思ひ出すと、彼の時ひよこ〳〵と頭を下げた醜体が恥かしうて、今でも腋の下から冷汗が出るやう

な』

人の心は兎角斯うしたもの、獨りで諄々思へばこそ、萬事悲しく惡い方へばかり引きつけられもするが、假令一人で泣き寄りの相手が出來ると、慰め合つた言葉の端が動機となつて、殘つて居た善と思ふこと、忘れて居た賴みの綱が段々太くなつて何とはなしに心丈夫にもなつて、遂にはその善いことばかりに心勇む樣にさへなるもので、現在の藤右衞門が即ち其である。

浪子も藤右衞門の元氣づいたのに誘はれて、胸中の苦痛が稍や薄らいだ樣でないではないが、さりとて、父は知らう筈のない、昨夜の中尉の言葉を思ひ出しては、疑ひの雲を一時に吹き拂ふ譯には、まだ行かないのである、中の思ひは自然外にも顯れる。

强いて心を晴した藤右衞門には、浪子の返事のないのが不滿でならぬ、下つた首の上らぬのが心もとない。

『お浪、お前は左樣は思はぬか、まだ駒井さんを疑つて居るのか』

『疑りは致しませんけれど……』

『ナニ、致しませんけれど？　けれと、けれど、どうなのか』

藤右衞門は案外といふ顏、膝を進めた、頸を伸した。

斯う急かれては直ぐいひ出せるものでない、況て浪子の胸中は、右思左考なのである。

返事のないのに、藤右衞門愈よ急きこんだ。

『コレお浪、駒井さんに何か思ひ當ることでもあるのか、さういへば昨日、春吉が召集のことを知らせに來ると直ぐ、お前は裏口から駒井さんの所へ行つた樣だがその時の樣子はどうだつた？　駒井さんの擧動に異つたことはなかつたか』

斯うまで問ひ詰められては、最う返事をしない譯には行かない、昨夜のことを話さない譯には行かない。

浪子は一伍一什を語つた。

藤右衛門は腕拱いた、俛首れた、が、遂に斯う聞いては、また疑念が鎌首を擡げぬでもない、微弱ながら嘆息をさへ漏した。

『成程左様いはれて見れば、妙に聞るる所のないでもない、が、俺にはどうしても其様な恐ろしいことをする人とは思へないから、ノウお浪、ことに依つたら、お前のいふ通り間諜におなりなすつたのではなからうか、……併し、其なら憲兵なぞの來る筈はなし、ハテ、……してその掛札さんとかいふ方は、久しい以前からのお友達か』

『ハイ、折々被來る様でございます』

『それなら尚更のこと、惡いことではあるが、その秘密のお話しといふのを聞いたら、少しは様子が分つたかも知れぬに！　して何か、その方は東京に被居るのか』

『ハイ、お住居は存じませんけれど、何でも參謀本部とかへお勤め遊ばすのださうですから、何れ東京なのでございましやう』

『參謀本部？、それさへ分つて居れば、お眼にかゝれないこともあるまいが……』

藤右衛門は暫時うち案じたが、軈て思ひ定めたらしい、一搖り身体を搖つて吃となつた。

『お浪。俺は一つ、その方にお眼にかゝつて見やうと思ふが、どうだらう？』

『ホンニ、左様でございますねえ、彼の方に伺つたら……』

『左様か、お前も左様思ふか、それなら後ともいはず、直ぐ今から行つて來やう』

重圍に陷つて、一條の活路を見出した嬉しさも斯くや、藤右衛門は蹶乎と立ち上つた。

『併し今日は最う遲うございましやうから、明日に遊ばしては……』

『イヤ、遅い早いをいつて居る場合でない、併し今日お眼にかゝられなければ、一晩泊つて、明日の朝お眼にかゝるから、そのつもりで留守を頼むぞ』

藤右衛門の姿は既や部屋の外へ消えた。

（六）

藤右衛門の豫想に違はず、その日は掛札大尉に會はれなんだのであらう、浪子は一夜を空く待ち明して、さすがに前の晩も寢なかつた疲勞で、拂曉になつてからとろ〳〵と眠つたが、惡夢に襲はれてふと眼を開くと、日は三竿、床の置時計は九時に垂んとして居る。

妾ゆへにかけるお父様の御苦勞、その妾が氣樂さうに寢過すとは！、最う歸つてお居でなさらうも知れぬに、

眼に見えぬ糸に操吊られる樣、浪子はぶら〳〵と立上つて、寢衣の前を搔き合はせた。

夫の惡名の拭ひ去らるゝまでは、家中の人に顔見らるゝも辛し、況て妾に邪慳のお母さんに。

一たび己が部屋を出ては、敵陣に忍び入る思の浪子、疊踏む跫音にも心を置いて、狹からぬ家の幾つかの部屋を、父の居間へと辿るのであつた、漸て辿り着いて襖一枚、是そ吉凶の分るゝ關の戸と思へば、自らなる胸も躍つて、赫と上氣の口さへ渴くのであつたが、就か定まる我が運命！、騷ぐ心を我と叱つて、戰く指を引手に掛ければ、愚しや、襖は開いてその人の影はなく、床の一軸何やらの大黑、我を見て笑ひ顏なるぞ憎らし。

浪子は呆然として佇立んだが、忽ち、

『オ、妾はどうかして居る、昨夜お泊りなさる位だから、掛札樣には今朝お會ひなさるのだらう、すればお歸宅は午后からに定つて居る。

浪子は力なく引返したが、ふと茶の間の方から話聲が聞える、耳を澄すと確に黒澤の聲である。

『また黒澤の奴が！』

腹立しさうに屹と睨んだが、

屹度また、お父様か駒井様の悪口をいつて居るに違ひない、……、オ、悪いこと だけれど、窃と聞いて居たら、もしや駒井様の御様子が知れはしまいか。

小首を傾けて暫し思案に沈んだ浪子は、爪先を見回はして、茶の間の方へ跫音を偸んだ。

※　※　※

固より田舎書請の不意氣は免れられぬが、梁上以來百何十年の古色は爭はれぬが、近在近郷に響いた素封家の本城、そのまた本丸とも見るべき茶の間であるから、木材の吟味に粗略なきはいふまでもなく、日毎にかける雑巾の光濟は照るばかり。

京聞の八疊、その一方の肱掛窓、これだけは近年更新へたらしい、硝子の箱つた障子の際に、後には桑の茶簞笥、前には欅の長火鉢、要害いと嚴重に搆へて居るのは、是ぞ浪子の繼母のお杉である、年は四十二三、容貌は普通で眼に劍のある方、頭だけ年を老り後れた樣な大丸髷を載せて、銘仙の綿入に、黒襦子の襟のかゝつた、藍辨慶糸織の半纏を羽被つて、鼈甲良苧の長煙管を斜に搆へた格好は、東京の風俗でいふなら、待合の女將、乃至は消防夫の嬶の化けそこないといひたい。

これと對向ひに火鉢を挾んで居るのは、これはまたお杉とは拳闘にもなりさうのない、眞岡木綿の紋附に小倉の乘馬袴といふ、さりながら、忌味は安香水でたつぷり匂はせて居る、二十五六の青二才である、いふまでもなく、お杉の甥の黒澤才二で時代後れのサビタの吸口を大事さうに、洗ひ晒した古手巾で琢磨きながら男一匹打壞しの圓栗眼を、時々忙しさうに上げて、相手の話に答へて居る。

お杉は間斷なしに煙草を煙にしながら。

それぢやア何かい、駒井の奴が昨夜の終列車で、怪しい西洋人と一緒に、神戸までの切符を買つて乗る所を、確に見た人があるといふのだね』

才二は何時か、面白く出る吸口の光澤に氣を取られて、返事も上の空、

『西洋人？　ア左樣です』

お杉は焦れて、煙草を甚く叩きながら。

『なんだね、妾のいふことも碌に聞かないで！　其樣な吸口なんか、捨ておしまひよ』

才二は、奪取らうとして出したお杉の手に驚いて、狼狽て懷中へ藏ひながら。

『聞きます〳〵、西洋人、左樣です、確に見た者があるのです』

お杉は、才二が眞面目に復つたので、出した手を引いた。

『それぢア愈よ露探なのだね』

才二はお杉の手から、無遠慮にも煙管をもぎ取りながら。

『一服頂戴、左樣です、無論露探に極つて居ます』

『若し左樣だとどうなるのかねえ』

『どうなるのかとは？』

『今は何所かに隱れてゐるだらうが、若し捕縛つたらさ』

『それやア定つてゐまさアね、無論死刑？　輕くて無期徒刑です』

お杉は安心したといふ顏色。

『それぢア、最う安心だねえ』

才二は何を思ひ出したか、急に元氣づいた、氣味の惡い笑をさへ浮べた。

『安心ですとも！　所でどうでしやう？　成べく速く願ひたいのですがなア』

『速くとは？　お浪のことかえ』

『左樣です』

殊勝らしくも顏を紅くした。

『それは最ういはなくつても承知して居るよ妾も前身が前身だし、伯父さんも最う彼の老年だし、到底小供の出來る見込はないから、左樣すれば、彼娘に婿を取るにしても、彼娘を他家へ嫁つて、別に養子を貰うにしても、血緣のお前でも入れて置かなくちやア妾が前途へ行つてから……』

『伯母さん〳〵』

才二は狼狽て遮つた。

『伯母さん、他家へ行つてとは情けないですよ、僕は此家の財産も欲いが、お浪さんと夫婦になるのが肝心ですから、强てといふなら、此の財産を棒に振つてゞも、お浪さんの方を取りますよ』

他人の財産を棒に振るとは奇しい話、お杉も思はず失笑した。

『オホ、、、、棒に振るも振らないも、まだお前の所有ぢアないぢアないか、眞實に逆上せて居るよ、此の人は！　其樣なにもお浪がいゝかねゑ、何所がいゝんだら

う？』

『何所がッて伯母さん、ウッフ、、、』

『お止しよ、馬鹿だねえ、眞實にお前は！』

折から襖を隔てた次の間で、お鍋の聲。

『オヤ、お嬢樣は其所に被居つたのですか！　お氣に入りのお花さんが參つて、お部屋にお待ち申して居りますよ』

とは嫉むらしくも聞える。

聞くと等く、お杉の眉はきり〻と吊り上つた、反對に才二の眦はでれりと垂れ下つた。

※　※　※　※　※　※　※　※

爲すべからざる惡事とは知りつゝも、夫の樣子を知りたさの一心から、母と黑澤と

の談話を立聞きした浪子は、その談話の中の、怪しい西洋人、神戸までの切符、などの言葉に、夫の身の上の愈よ氣遣はるゝに加へて、情けない母の心事と、忌らしい才二の執着とに、悔しさ腹立たしさは胸も張り裂んばかりなる矢先、一思はぬ春後から無遠慮なるお鍋に呼ばれて、ハッと驚き心騒げば、何前後の思案の浮ぶ暇もなく、そのまゝ己が部屋へ駈け込んだ。

其所はお鍋の言葉に從はぬお花、其と見て、

『オ、お嬢様、まアどう遊ばした？　そのお顏色は！』

ならば譯を打明けて、共に怒り悲に泣いても貰ひたいが、愼みなげの立聞、その罪が覿面の此の狼狽、道に明しもならぬ、彈む胸を熟と堪へて、

『イ、エ、どうもしばしないよ、併しまア、よく來てお呉れだつたねゑ』

柄のない所へ柄をすげて、浪子を窘るを無上の樂みとする、憎く〳〵しいお杉の平常を知るお花は、今日も大方は甚よと推して、且つ、根を掘つてまで深く問ひ詰るのは、繼母の虐待を受けながらも、他人には成るべくその非所を包む浪子の孝心に對して、却つて苦痛を與へる樣なものだ、と氣がついたのであらう、敢て以上を問はふとはせず、自分に對する浪子の挨拶に答へた。

『ハイ、實は昨日にも參上らうと存じたのでございますけれど、春吉の見送りに親類どもが參つて呉れましたので、つい忙しうございましたものですから』

とまではいひかけたが、決別の悲哀はありながらも、天晴れ日本の軍人よ、目出度い凱旋を祈るぞよと、知るも知らぬも見送つて呉れた人々の口から、夫の出陣を奬まし祝はれた時の嬉しさを思へば、其に引換へた、浪子の悔しさ悲しさが察しられて、此の上何とも言葉の接穂を見出し得ないのである。

兩人は俯向いたまゝ、暫し無言であつたが、浪子先づ堪へ切れなくなつて、一滴膝へ落すと、伏目ながらも其と見たお花、忽ち此の一滴に誘ひ出されて、最う耐らず顏を抑へた。

『お嬢様ッ、お察し申しますッ！』

『お花やッ！』

浪子はついと寄り添つて、お花の膝に泣き崩れた、お花の手は更に浪子の脊にかゝつた。

浪子はお花の主人である、併しお花を姉の様に思つて居る、お花は浪子の家來である、併し浪子を妹の様に思つて居る、浪子が笑べばお花も笑ふ、お花が泣けば浪子も泣く、骨肉の姉妹でも此程のは滅多にあるまい、お鍋一輩の嫉妬は蓋し此から出るのである。

浪子の顔からお色の膝、お花の手から浪子の背、相愛相慕る至情は兩人の身体を一つに循環して、果は無念無想に境にまで入つたが、斯くては果じ、お花先づ吃と

なつた。

『お嬢様、貴嬢はどう思召しますか』

所謂る雨後の海棠！ 浪子は涙に濡れたまゝの顔を斜に見上げた。

『どうとは？』

姉たるもの、遠に訓める、口吻も交る。

『どうと申して、駒井様を何と思召します？ 他人のいふ様な、彼様な方だと思召しますか！』

今朝からではない、昨日からではない、事變のあつたその日から、お別れ申したその時から、片時忘れられない駒井様ではあるが、他人の口からいはれて聲に聞いてはまだ、今更の様に思はれもする、胸も新に動悸を打つ、心も吃と引締る浪子はお花を離れて座り直した。

『お花、お前は妾の心を知つてゞお呉れではないのかえ』

『ハイ、存じて居りますとも、存じて居らないで何と致しましやう、では假…他人が何と申しましても』

『妾はどうしても』

『其様な方とは思へないと被仰るのでございますか』

『ア、』

『左様でございましやうとも！　左様なくてはなりません、男の中の男とでも申しましやうか、御人品といひ、お氣質といひ、妾でさへ……オホ、、、、、御免遊ばせ、その駒井様が、こともあらうに、……、滅相な、其様なことがあつて堪るものでございますものか、然れをお嬢様、春吉までが……、妾は眞實に悔くつて悔くつて、是が平常の時なら、彼の口の端へ食ひついて食ひついて、其で愚圖々々いふなら、離縁でも何でも取る氣なのでございますけれど、戰爭へ行くのぢアありますし、一つは逆上せて居るからなのでしやうと存じまして、其故でまア胸を撫つて居たのでございますよ』

彼の時の春吉の様子、お花の日頃の氣質、思ひ合はせ矧ぎ合はせして見れば、情に

騙られた此の獨合點の話も浪子の胸に其と首肯かれぬではない、また、我を措いて外に、斯くまで夫を信じて呉る人があると思へば、嬉しさ辱、なさが、染々と身に泌みて、どうやら急に心強くもなるのである、浪子はまた嬉しさに泣かされた。

『お花、左様いつてお呉れのはお前ばかりだよ、妾は眞實にお前が頼りなのだから』

『何様なことがあつても行捨てお呉れでないよ』

『なんの！　お嬢様、つまらないことを！　斯う見ても花は、亂は江戸兒でございますよ、一旦斯うと、思ひ込んだ方には、是が非でも離れることぢアございませんん』

『それなら若しも、若しも駒井様が眞實彼様な方であつて、妾が世間の笑ひものになつても？』

『ハイ、左様なれば尙更！　妾は襟元へつく様な人間ぢアございません、併し縁起でもないことを！　それとも何か、お心當りでもおあり遊ばすのでございますか』

お花の顔色は稍や動いた、返事の遲いのに急き込んだ。

『お嬢樣！　如何でございます？、お秘し遊ばしちゃお怨みでございますよ、妾はお嬢樣のお爲めとなら、火の中水の中でも飛び込むつもりで居りますに！』

此のお花、胤は江戸兒と自負するだけに、何所やら動かぬ所があつて賴母しい。

秘しはしない、たゞいふが辛いばかり、お前に秘して誰に明さう！　お前でなくて誰が此の苦痛を分けて呉れやう！

父へ明したゞけのことを、浪子はお花へも明した。

併し、朝夕中尉の傍に侍した爲めであらうか、それならばお花に限らぬ、春吉も左樣であつた、否、お花が中尉を知る以前、春吉は從卒として、既に三年をより多く中尉に接して居る、その春吉でさへ中尉を國賊と罵つて行つたでは外に中尉を深く信ずる謂れを、お花は持つて居るのであらうが、いな、あらう筈がない『一旦思ひ込んだら是が非でも離れぬといふ、氣性が、或は是れなのかも知れぬ、夫春吉の言

葉に首肯せなんだお花は、藤右衞門にさへ『若しや』の念を起させた、賴み少ない浪子の語る一々を聞いても、己の當初の所信を變へぬ、左樣あれかしと願ふ、…子の一縷の希望に左袒した、そして、中尉に對する尊敬を一層增した樣である。

『成程左樣承へば、妙にも聞えますけれど他の方ではなし、お嬢樣の被仰る通り、屹度その間諜とかいふのにおなり遊ばしたのでございますよ、休職とかにこそなつて被居やいましたけれど春吉も始終左樣申して居りましたが、聯隊でも評番の傑い方だつたさうでございますから、其故で其樣いと難しいお役をお引受け遊ばしのでございますよ、また、憲兵の申すことだつて、屹度間違ひがないとも限りますまいし、假眞實にした所が、もう一つ先潛りをして見たら、敵に悟られない樣にわざと惡名を觸れ散すのかも知れないではございませんか』

いはれて見れば、成程左樣かも知れぬ、裏に裏がないとも限らぬ、浪子は豁然として胸が開いた樣な氣になつた、我知らず膝を進む。

『ホン、ニ左様だねぇ！』

途端に部屋の外へ近づく足音、話の腰を折つて襖が開くと、其所には藤右衛門の立姿。

（七）

同席は畏れ多し、恭やしく一禮の後、お花は部屋を滑り出た。

夫の身の吉凶は父の唇の動き方一つ、浪子戰々顔を上れば、惡い、藤右衛門の顏色頗る惡い、ハッと驚いて俯向く、其を機會に。

『お浪ッ、御先祖様に申譯がないぞッ』

『エ、ッ』

正に千斤の鐵槌、浪子の胸はグザと潰れた。

いはで止まば知らぬこと、一度口を衝いて出た以上、養え返る胸には最う蓋が出來

ぬ、藤右衛門は疊みかけた。

『御先祖様に申譯のないばかりか、最う世間へも顏向けが出來ぬ、大手を振つては門外も歩けぬ、人交はりが出來ぬ、コレお浪ッ、お前はいひ様のない不孝ものだぞッ、思へば憎い國賊め、他人の娘を廢物にして、よくもくこの藤右衛門の顏へ泥を塗りをつたなッ、お浪ッ、どうしてくれるッ？』

藤右衛門は握り締めた拳を膝頭に埋めて、ハラくと熱涙を落した。

浪子は、父の言葉の端に力を入るたび、一々胸を抉られる樣、

ア、最ういつて下さるな、其だけ承へば分りました、若しやと思つた賴みの綱も斷れました、最うくく何もいつて下さるな、皆な妾が惡いのです、お父樣のお顏へ泥を塗つたのも妾です、どうして呉れると被仰つても、最う外に仕樣もありません、どうせ生て甲斐のない妾、御先祖樣へは死んでお詫を致します、死んでお顏の泥を洗ひましやう。

『お父様ッ、妾は最う、最う覺悟を決めましたッ』

『ナニ、覺悟?』

藤右衛門道眼を見張つた。

『ハイ、し死んでお詫を致します』

『死ぬッ?』

殆ど無意味に驚いたが、忽ちその意を得たかの樣。

『ウン』

と、先づ胸を張つて、重々しく。

『よくいつた、よくいつた、高山の家はたゞの百姓とは異ふ、武士の末流じや。不義はしてもその覺悟左樣にくては叶はぬ、ならば殺したい、死んで貰ひたい、が左樣は行かぬ、殺す譯には行かぬ』

いひさして、藤右衛門は胸の苦痛に悶く体であつたが、聽てまた言葉を續けた。

『お浪、殺せぬ譯いつて聞かせうが、驚くな、泣くな、お前ばかりが、この俺までが、豈失と思つた彼の駒井めはなア、眞實齋探じやさうなわいッ』

『エッ、眞實?』

『コレ、未練なッ、死ぬといふたでないか!』

『ハイ』

浪子は全く絶望した、最う身体を支ゐる力もない、そのまゝ崩折れた。

『まア聞け、斯うじや』

藤右衛門は語り續けた、その要を摘めば。

藤右衛門浪子の兩人が一縷の希望を繫いだ、駒井中尉と掛札大尉との秘察の談話がいふのは、實は秘密といふ程のことではなかつた、其を秘密らしく見せかけたのは却つて自分一箇の秘密を隱さうといふ駒井中尉の奸策で、大尉は藤右衛門浪子等と同じく、中尉に欺かれたのであつた、隨つて中尉が露探であるといふことは、最早

や掩ふべからざる事實であつて、而も、その證據として彼が遺した失敗は、觀音崎の砲臺の地圖を掛札大尉の手から欺き取つて、其を功に露國の陸軍へ採用して貰はうといふ、休職といふ彼の位置から考へて見ても、隨分ありさうに思はれる事柄なので、彼の爲には不幸であるが、我が國の爲めには幸福にも、丁度動員令の下つてその日、思へば不覺であつたが、年來の親友ではあつたし、一つは研究の爲めといふ言葉に釣られて、秘密の砲臺圖を貸與へやうとして持つて來た大尉の爲めに、天罰でゞもあつたらうか、露國人から來た秘密の手紙を、端なくも机の下から拾はれたのである、この手紙を見て其と知つた、その時の大尉の驚愕は、たゞ樣であつたらう、体内の血液が一時に冷却した樣に思つたさうだが、中尉の心づかぬらしかつたを幸に、無論約束の地圖のことは曖昧に言葉を濁して、暇乞も匆々、その足で直ぐ浦賀の憲兵分隊へ駈けつけて、居合せた十幾人の憲兵を、時を移さず逮捕に向けたのである、所で大尉のいふには、僅か五分十分の爲めに捕り逃した殘念さは、濟んだことで仕方がないとして、同時に參謀本部から、各地の憲兵隊並に警察署へ打電して、旅客の乘船に嚴く注意する樣、との訓令を與へたから、露國は無論、一歩たりとも海外へ出られる氣遣ひはなし、早晩捕縛されるには定つて居るが、就いては御息女とは關係があつた樣だし、或は愛に引れて、お宅へ忍び寄らんとも限らんから、是れは追つて公然の御沙汰もするが、若し其樣なことがあつたら、最寄りの憲兵屯所なり警察署なりへ、直ぐ密告して貰ひたい、また、御當人に對してはお氣の毒の次第であるが、當分此方から沙汰をするまでは、人質になつたものと心得て、他家への緣組等は勿論、勝手の身の振り方は、一切慎んで貰ひたい、併し斯ういふのも、一つはまだ正式の結婚をして居ないのと、一つは情を知らないのとに免じての、寛大の處置を取つて居るのであるから、萬一此の命令に背くに於ては、容赦なく犯人の緣類として、相當の手續きをする、とのことであつた。

といふのである。

藤右衛門は掛札大尉の口から聞いて一々を語り聞かしたが、一段と語氣に力を込めて、

『お浪、どうじゃ、死んでならぬ譯分つたか、悔しいではないか！　國賊の人質、賣國奴の縁類、いひ様のない惡名を家に受けて、其を雪ぐこともならぬとは！　俺ア最う胸が裂る、最う腸は煮え返る、お浪ッ、俺ア生れて此様な悔しい思ひを、……したことはないわッ』

唇を嚙んでも耐へ切れぬ涙、其をぐいと横に拭つて、藤右衛門ブル〳〵と身を顫はした。

纖弱い女の身には、餘りの呵責ではあるまいか、浪子は最う身動きもせぬ。

死ぬに死なれぬ苦痛、是も不義の天罰かや。

お父様の御立腹もさら〳〵御無理はない、家の名を汚した女、親の顔へ泥を塗つた娘、さぞお憎いことであらう、死んでならぬとあれば、せめて此の上のお詫には、

その密告とやら、最う其様なことはあるまいけれど、萬に一妾に心を引かされて、若しも駒井様れ歸つて被來つたら、妾には大事の夫だけれど、國の爲めには大惡人潔くお上へ突き出して、妾の貞操を國の爲めに代へたなら、汚れた家の名、泥を塗つた親の顔、幾らか洗ひ清められるかは知らぬが如何に大惡人の夫なればとて、如何に貞操を破る覺悟なればとて、いはゞ、我が手に刄を持つて、夫の喉を刈る様なもの、妾を氣の狂はぬ以上、何として何として……、アゝどうしやうどうしたらよからう？！　神様、佛様、どうぞ夫の心が妾に引かされませぬ様、どうぞ〳〵、どうぞお護り下さいましッ。

浪子の此の姿を見ては、道に親子の情、不憫と思ふ心の出ぬでもない、己が言葉の餘りに嚴しかつたを悔ひぬでもない、藤右衛門は稍や聲を和げた。

『お浪、併しお前ばかりを咎めはせぬ、俺も惡かつた、見損つた、況てお前は、血も燃え立つ若い女子じゃ、思ひ詰めては、人を見る眼の曇るも道理、血氣の過失と

いふても他人は免さう、併し俺は左樣は行かぬ、分別も人並には出た筈、五十を越して、思へば是が悔しい！　何所にどう見損ひがあつたかお前より前に先づ惚れ込んで、世間の親の叱る不義を咎めぬのみか、知つた人に遇ふ度に、婿に取ります嫁に遣りますと、いはぬばかりに風聽した馬鹿さ加減、自分ながら腹が立つ、といふた所で、濟んだことには是非がない、たゞ此の上は今後じや、今までのことは、知らなんだといへば申譯も立つが、最う左樣は行かぬ、この上不都合があつては、同罪、免れられぬ、最う合點も行つたらうが、よく此所を辨へて、掛札さんの被仰つた通り、何事もお上の指圖に背かぬ樣、若しも駒井めが來をつたならお前が直にとも行くまいから、氣取られぬ樣にして、俺の所へいふて來い、諾しか、その場になつて、未練なぞを出すことは、決してならぬぞ、式を擧げなんだがまだしもの幸、今から最う夫婦なぞと思ふてはならぬぞ、駒井めは憎いがお前は可愛い、そのお前が命を懸けた憎い駒井、未練もあらうならば、免して、曲つた心を叩き直してもやりたいが、國賊、國家の大罪人とあつては其もならぬ、諦めろ　家の爲めじや、國の爲めじや、諦めて呉れ、……どうじや、コレお浪、何故返事をせぬ、それとも、情人の爲めには、家も親も棄る氣かッ』

『ハイ、否ゑ』

『では諦めがついたか』

『ハイ』

『必ず未練を出してはならぬぞ』

靜かに起つて、なほ泣き伏したまゝの浪子の姿に、凝と氣遣はしげの眼を据へたが忽ち氣を換へて、

『お花、お花は居らんか』

『ハイ』

急ぎ來つて闕に跪づくお花、藤右衛門それと見て、重々しく、

『お花、少し相手をしてやつて呉れ』

言葉を遺してずいと部屋を出た。

(八)

露西亞人にとつては、恐らく忘れられまいと思ふ一月二十七日、太陽暦に換算して二月八日、ワリヤーグ、コレーツの二艦が仁川沖に於て、先づ戰局の決を卜した以來、曰く旅順口の水雷艇夜襲、曰く決死隊の港口閉塞、一戰ある毎に號外の報する所は、日清戰爭以降、日本軍には必ず附きもの〳〵、勝利の快報と、勇將猛卒の美談とであつた。

さなきだに燃え立つた敵愾心、外征將士の此の武勇を聞いては、後援者たる國民の何條默して已まるべき、假令銃劍に握らずとも、假令彈雨は冒さずとも、國に盡す赤誠軍人に劣るべきかは、權門富貴の巨資を献じて惜まぬはいはずもがな、或は軍

資の献納に、或は遺族の救護に、兒童走卒と雖も猶且つ己を節して、微力國に効さんとするの愛國心は、津々浦々、苟くも日章旗の飜へる限り、聲となり形となつて到る所に横溢するのであるが、時も時、折も折、或る朝の都下十幾種の新聞紙は、一段半に亘る紙面を二號活字で埋めて、この與奮したる國民の愛國心に大刺戟を與へた、大刺戟とは何？　いふまでもなく、駒井中尉の露探問題である。

國賊！　賣國奴！　露探！　是は新聞紙を手にした人の口から、等しく衝いて出る熱罵の聲であつたが、事變の發端の内川村には、この新聞紙の記事以外、更に村民をして村の不名譽を痛恨ましむるものがあつた。

動員下令の日から筭へて四日目、藤右衛門が掛札大尉に面會した日の翌日、再びお花を驚かしたのは、同じく浦賀町からの憲兵の一隊であつた、今度の用向きといふのは、駒井中尉が或は窃に歸つて來はせぬかといふ萬一の掛念から、中尉と直接の關係ある春吉の家は勿論、内川村全村に對しても嚴重に警戒を加へるのであるとの

ことで、滯在中の炊事一切を、否應なしにお花へ命じた上、その宿舍として、中尉が住んで居た別房を占領して、中尉が露探であるなし、兎に角、負かぬ氣のお花には、この强制がましい命令が氣に食はぬが、さりとて背く譯には行かぬ、澁々承知した、憲兵に食はせる飯のさぞ不味いことであらう。

己が村を憲兵に監視されるとあつては、國民としての体面、他村への外聞、この上もない村の不名譽であるからといふのが、その日に開いた臨時村會の決議で、村會を代表した村長が、即刻浦賀町の憲兵屯所へ出頭して、萬一中尉が歸つて來た曉は村の者が總出になつてゞも、必ず捕縛して差出しますから今日の場合、村の名譽の爲め、出張の憲兵を引揚げて戴きたい、と、一向に哀願しても見たが、無論聞き届げらるべき、筋ではなかつた、で、是に對する怨恨は直に中尉に向つての熱罵の度を加へた、併し相手のない喧嘩は出來ぬ、この怨恨は軈て、中尉との關係を知つて居る高山家へ轉じて、罵詈讒謗の惡聲は藤右衛門浪子兩人の周圍に蝟集した

が、兩人を苦める原因は此に止まらなかつた、

憲兵がお花を再び驚かした、その日、その日の午后、掛札大尉が高山家を訪れた、そして其は、個人としてとはなく、公務を帶びて出張したのであつた、大尉は先づ、既に藤右衛門には內訓を與へて置いた通り、浪子の身の處置に關する心得を、今度は職務上から嚴重にいひ聞かせた後、更に少からざる苦痛の種子を與へた、其は、大尉のいふ所に據ると、高山の家は既に、駒井中尉とは淺からざる關係を結んで居るのであるから、本來は春吉の家と同じく、監視として憲兵の宿泊せしむべきではあるが、土地の名家といひ無下に名譽を毀傷るのも氣の毒であるから、これは單に春吉の家に居る憲兵に命じて、時々屋外から親察させるに止めて、その代りに毎週少くも一回、掛札大尉自身が出張して、家內の樣子を視察する、といふのである、成程名譽を毀傷ぬ樣との寬大の處置ではあるが、既に屋外から監視を受ける以上、狹い村のことであるから、何時まで他人に知れずに居るものではなし、高

山の家名は實に散々にされるのである。

果してその日から、日に二回乃至三回、憲兵が家の周圍を巡回る樣になつた、果して村民の眼に入つた、果して噂は廣がつた、これが自然藤右衛門の眼にもつく、浪子の耳にも入る、兩人の苦痛は筆紙に盡させない。

世間へ顏出しをせぬは無論、藤右衛門は己が一室に籠つたまゝ、浪子とも滅多に顏を合せなくなつた、或は謹愼の意を表して居るのかも知れぬ、家の內は火の消ゑた樣になつて了つた。

旬週少なくも一回といつた、掛札大尉も來はじめた、併しこの方は、最初の中こそまだ名染が薄いので、一通りの用事の外には餘り談話もしなかつたが、二回三回と重なにる從つて、性來の談話好きでゝもあらうが、公務の外の談話に花を咲かせて浪子とは既に駒井中尉の家で度々落合つて居るか、藤右衛門とも段々打解け合つて三人一度に笑ひ出すことさへある樣になつたので、藤右衛門、殊に浪子は、大尉が

帶びて居る任務の性質をも忘れて、自分の慰籍者でも來て呉れるかの樣、遂には大尉の訪問を待ち詫るまでに打解けた。

が、併し、大尉に對する浪子の此の態度を以つて、直に浪子の貞操を疑つてはならぬ、浪子は其樣な女ではない、彼が打解けたといふのは、飽くまで打解けたのである、單に打解けたのである、打解ける以外には何等の意味もないのである、併し斯うまで打解けるには、矢張り相當の原因はある、原因とは？　外でもない。

大尉と駒井中尉とは、年來の友人ではあつたが、中尉が露探であるといふことは、大尉自ら藤右衛門に向つて明言したのであるから、中尉に對する同情？　は多少あるかも知れぬが、自分を軍人といふ位置に置いて、少くとも日本人といふ位置に置いて考へて見たら、露探といふ、證據のある以上どうしても、憎まぬ譯には行くまい、といふのが、大尉に對して當然抱くべき浪子の憶側であるが、彼は、或は迎へ見る眼の誤りかも知れぬが、中尉に對する大尉の憎しみは認めながらも、尙その言

葉の機微を通して、中尉の前途に向つて尙一縷の希望を繼ぐ樣な、また、その妻たる自分に對しても短慮を戒める樣な、悟れかしの素振が見られぬでもないので、是から起る若しやといふ念が、少からず大尉を懷かしくまた頼母しく思はしめて、隨つて打解けもするのである。

併し、浪子を斯くまでに打解けさせる、原因たる彼の眼に映る大尉の素振といふ奴は、所謂る素振に過ぎないので、大尉が歸つて了つて獨りになつて、また諄々と思案に沈み始めると、露探に違いないといひ切つた時の大尉の顏の眞面目であつたこと、憲兵が來て見張りをするまでの大事件といふこと、その見張りをさせる參謀本部のいふことに間違ひはあるまと思はれること、また、訣別の時に聞いた中尉の言葉が氣にかゝること、何や箇や、憎らしい程確實な反對の證據が胸に浮んで、折角出來かゝつた頼みの綱も、寸々に截り碎かれて了ふのである、が、するとまた、其所へお花といふ助手が出て來て、此の寸々になつた頼みの綱を搔き集めて、捻るや、

ら結ぶやら、兩人で酷苦して繼ぎ合せて、また、大尉が來て本捻りをかけて呉れるまで、漸うに持ち耐へて居るのである、であるから、これ以上頼みの綱を太く丈夫にしやう、なぞといふ慾は遂げられぬが、弱いながらも、斷れ易いながらも、兎に角形体だけでも、頼みの綱が出來たのは、大尉の來ない前に較べて、浪子の爲め確かに幸福といはねばならぬ。

藤右衛門は兎に角として、いはば偶然ではあるが、大尉が視察に來る樣になつた爲めに、浪子が蒙つた恩惠は、以上の一事のみには止まらない、彼は別に一大苦痛を免るゝことが出來た、藤右衛門の手前、迫に手荒な折檻こそしないが、針で突く樣な人知れぬ呵責に加へて聞けば郡長某といふ黑幕もあるとかの、己が血緣のものに高山の身代を讓らうといふ惡計から、駒井中尉との關係を承知の上で、甥の才二を婿に取れとの繼母の難題、浪子は、この難題に苦められながらも、父と中尉との心を頼みに、昨日までは何かといひ逃れつゝ、一向ら嬉しく願ひの叶ふ日を樂しんで

居た矢先、思はぬ事變に願ひの仇となつたのみか、敵の乘ずる弱點を我に作つて、昨日に愈増す苦痛を受るのであつたが、むつけの幸は大尉からの嚴達、緣組は勿論勝手の身の振り方は一切ならぬの、一言に見事敵の息の根を止めて、浪子は茲に苦痛の片荷を下したのである。

露探問題が起つた當時の内川村の有樣は、先づ此樣なもので、この外、村長の發案で村會が可決して、駒井中尉も捕縛した者には、賞金二十圓を與へるといふ、これは富籤類似で差止められる氣遣ひはない、懸賞募集、ではない、懸賞逮捕(?)の立札が、村道を通じて三本まで立てられたことや、憲兵が駒井中尉の居た家へ宿舍したのは、單に宿舍の目的ばかりではない、平常中尉の飼つて居た二十餘羽の鳩が、中尉が逃亡すると同時に居なくなつたのは、不斷から傳書鳩として馴してあつたので、中尉は露國へ行つてから、日本に居る同類と通信するに爲めに、一所に持つて行つたのに違ひない、其故で憲兵が彼所に見張つて居て、巣へ歸つて來た、■を捕へて、その脚なり羽翼なりについて居る、秘密の手紙を取らうといふのが、第一の目的であらう、と、小學教員らしい男が、此の立札の前で説明して、居合せた田伍作以下十幾人をアッとばかりに、感服させたことや、何や、箇や、日露戰史を飾るには、隨分結構な材料がないではないが、この小説に關係のない方々の芳名は、遺憾ながら掲げるたけの餘白がない。

斯くて、海戰に續いての陸戰の捷報を聞きながら、内川村の春は速くも三月四月と闌けた。

(九)

固より田舍のこと、大宮人が小手打翫す樣な、櫻花とては餘り見當らぬが、何といつてもこの頃の陽氣、田舍は田舍だけに、都會に見られぬ菜の花盛り、靑々と伸びた麥畑に黃を混ぜて、彼方に菱形、此方に四角、西京名物舞子の帶でも見る樣に、

ヲモまア見事に織り出した中を、そよ〳〵と吹く春風に乘つて、ちら〳〵、ひら〳〵、しなを繕つた蝶が飛んで居る。

折から一節、森蔭を通る鄙唄、

わたしや菜の花、畑に咲けば、
浮氣蝶々が來て嬲る。

低いながらも幅のある美い聲が、野の澄み渡つた空氣を美妙に顫はせたが、驚て森を出て畔に殘つた唄の主は、手織木綿の袂も短く、衣の色に艶を競ふ都振りこそ見えね、姿なら、容貌なら、鄙には過ぎた美しさのお花である。

お花は今、午食の後片附を漸く濟せて、日に一度づゝは堅い約束の、浪子を訪ひ慰むべく家を出ての途上、長閑の景色につい誘はれて、裾を端折つて脚半甲掛、赤い緒の管笠被つて、一番草二番草、若い男に混つて曳いた時の娘氣に歸つて、坐に昔を忍ぶ節を唄ひ出したのであるが、我に復つて道に恥しく、日に照る顏を颯と

紅らめると、途端に。

『お花さん、美い聲だねえ』

突然に呼びかけられて、喫驚、振り向くと、思はぬ背後に黒澤才二の笑ひ顏。

好かぬ奴かとは思へど、道に女、お花愛想らしく、

『オヤ黒澤さん、お人の惡いこと、突然に』

既や進み寄つた才二、さなきだに間の抜けた面を、紐を緩めた大口で一段と打壞しながら。

『アッハ、、、、、お前には突然だらうが、僕は突然ところか、先刻から此所に待ち構へて居たのだよ』

『エッ、待ち構へて?!』

お花は氣味惡く、一歩退つた。

『アッハ、、、、其樣なに逃げなくつて大丈夫だよ、斯う見えてもまだ人殺しはし

たことはないから……、實は少しお頼みがあるんだが、何だらう、お前はこれからお浪さんの所へ行くんだらう』

お花は悟つた、可笑くもなる。

『オッホ、、、、また艶書のお使ひですか』

才二は道が顔を赧めたが、厚顔しく懐中から一通取り出した。

『左樣いはれると面目ないが、お花さん、頼む、これだ』

何たる醜体だらう、片手拜みにお花を拜んで、浪子樣參るを突きつけた。

此樣な奴が居ればこそ、お嬢樣の御難儀も增る、と思ふと、お花は腹が立つて、撲りつけてもやりたくなる。

『コレサ、其樣な怖い顔をしないでさ、お前は僕の苦しい胸中も知つて、居るだらう、頼む、頼む』

お花はあらぬ方の菜の花に眼を据へて居だが何か思ひ浮べたことでもあるか、急に

笑ひ顔になつた。

『眞實に御執心ですことねえ』

『御執心？！　御執心どころかい、彼の人ゆへなら命も熨斗だ』

『オッホ、、、、ではその御執心に免じて』

『エッ、ぢア屆けて呉れるか』

『屆けもしましやうけれど、貴方は駄目ですよ』

『ナニ、駄目だ？　何が、どうして？』

『どうしてッて、貴方はまだ初心ですもの』

『初心だ？！　ぢアどうすればいゝ？』

『オッホ、、、、教へませうか』

『教へて呉れ、頼む、拜む』

『オホ、、では、情交といふものはね』

『情交といふものは』

『一押二金三縹緻とかいひましてね』

『一押二金三縹緻、成程』

『オホ、、だから押しを強くしてかゝらなければ駄目だといふのですよ』

『押しを強くといつた所で……ぢアどうすればいゝだらう』

『貴方も隨分切れの悪い方ですね、ぢアまアいゝから今夜被來いよ』

『被來いとは、お浪さんの所へかへ！』

『お止しなさいよ不体裁い、其樣な顏をするのは、定つて居まさアね、お嬢樣の所でなくて、何所へ行くのです』

『まア左樣怒つて呉れるなよ、ぢア僕が今夜行くとして、それまでにお前が、お浪さんを納得させて置いて呉れるといふ寸法なんだね』

『どうだか、其所までは請合はれませんが、兎に角、お嬢樣のお部屋の横手の、非常口の鎖鑰を脱して置きますから、十一時でも報つたら、他人に知れない樣に其所から入つて、後はどうとも、其所がそれ押しさアね』

『成程、押しだなア』

才二は心細さうに俛首れた、お花は後方を向いて内所で吹き出した。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

『お花、何だか、いつてお聞かせよ』

『申しても宜しうございますけれど、申さない方が、オホ、、、却つてお樂みでございますよ』

お花は浪子の相手をして居るのである。

『でも何だか、妾氣味が悪いもウ』

『悪いどころか、氣味の良いことなのでございますよ、オホ、、、ではまた明日』

『最う歸るのかへ、まだいゝぢアないか、お前に歸つて了はれると、妾眞實に、心

細くなつて』

『左様被仰られると、妾もお傍に居たうございますけれど兵隊さんのお夕食も調理へなければなりませんから』

『では明日も、また屹度來てお呉れよ』

『ハイ、參りますとも、では御機嫌よろしく』

お花は椽側から下りて、飛石傳いに柴折戸を出た、浪子はその後姿を、懐かしさうに見送つて居ると、背後の襖が開いて、繼母のお杉が入つて來た。

『お浪さん』

浪子は慄然として振向いた。

『大變陽氣な笑聲が聞えたが、向か面白いことでもあるのかへ、あるなら少し聞かせてお呉れな、外聞が悪いと思つて屋外へも出ない所爲か、妾ア氣が鬱しで困るんだから』

徐々と締めにかゝつた、浪子は垂首れたまゝ、返事の仕様もない。

『眞實にいゝ氣なもんさね、親達の顔へさんざ泥を塗つ置いて、それで平氣な顔をして、氣樂さうに』

浪子は最う悔しさが胸へ突き上げた、遽に遮つた。

『アレお母様、妾が何で平氣な顔を……』

お杉は憎々しい笑を浮べて、

『オヤ左様かい、平氣ぢアなかつたのかい、氣樂ぢアなかつたのかい、左様だらうねえ、平氣でも居られまいね、氣樂でもあるまいね、幾ら厚顔しく搆へて、露探の胎兒がお腹にあつちアねえ』

『エッ』

『オホ、、、何だねえ、其様な仰山な顔をしてさ』

浪子は何といひ様もない、たゞ最う胸は亂鐘、慢へ前髪をつけた。

ア、どうしたらよからう！　お花の外に知れる筈のないこのお腹のことを、どうしてお母さんが御承知だらう、當分は妾と黒澤とをどうなさることも出來ないので、その鬱憤でもあらうか、この節は一入妾をお窘めなさる矢先、ア、どうなることであらうか！』

冷かな眼で見下したお杉は、鼻で笑つた。

『フ、ン、また泣くのかい、お泣きのかい、よく涙が盡きないね、だが、何も泣くことはないぢアないか、世間ぢア赤兒が出來ると、赤飯にお頭魚で祝ふよ、情夫の胤を宿したんだから、目出度いぢアないか、併し露探の胤ぢア、餘り感心も出來ない譯さね、オホ、、』

浪子堪らず、泣く音を漏した。

『其樣にお泣きのは悔しいのかい、妾に知られたのが悔しいのかい、それとも、露探の胤を宿したのが悔しいのかい、オ、左樣だらう、如何に惚れた男でも、露探と

聞いちア、愛想を盡かさずには居られまい、その愛想の盡きた男の胤、露探の胤を宿したのだから、是れは成程悔しからう、悔しいに違ひない、お浪さん、察して上るよ、併し妾も親だから、お前の苦しむのをたゞ見ては居ない』

お杉は懷中から一貼の散藥を出して、浪子の前へ差しつけた。

『サ、此藥をお飲み、露探の胤なんか、直ぐ墮胎て了ふから』

『エッ』

浪子思はず顏を上げた。

『何も驚く程のことはないんだよ、たゞ呑めばいゝんだよ、呑めば直ぐ墮胎て了ふんだよ』

『お母樣、貴方はまア……』

浪子はまた泣き伏して、身を顫はした。

お杉はまた冷笑を浮べた。

『まアとうだといふのだい、鬼だとでもいふのかい、成程鬼かも知れないが、妾だつて好き好んで鬼になるんぢアないよ、皆なお前が鬼にするんだよ、お前の不義が鬼にするんだよ、斯ういつたら無慈悲な親だと思ふか知らないがよ、ア考へて御覽、お父様は世間へ顔向けが出來ないつて、閉門同様にして被居るぢアないか、其所へ赤兒が生れたら、お前は何と申上るつもりだい、露探の赤兒が生れましたと、お前はいふつもりかい、其を見てお父様がお喜びなさると、お前は思ふのかい、お喜びなさるどころか、お父様を苦しめる様なものぢやアないか家の恥辱を上塗りする様なものぢアないかこの上お父様を苦しめても、この上家の恥辱を露しても、お前は平氣なのかい、其様にしてまでも、彼の駒井め、彼の露探めが可愛いのかい、その お腹の兒が大事なのかい、お度さん、お浪、それでは濟むまい、サ、お呑み、その藥をお呑み、呑まなければ親の威光で、口を割つてでも呑ませるよ』

お杉は段々凄味を帶びて、遂に毒婦の相貌になつた、忌といつたら、隨分口も割り

兼ねまい。

浪子は、何と答へも泣くばかり、といつた風である。

妾が憎くてならぬお母さんの被仰ること、どうせ柔しいお言葉のあらう筈はないがさりとて、罪もないお腹の赤兒まで殺せとは、餘りなお言葉ではあるまいか、成程被仰る通り、今にこの兒が生れたなら、この上お父様を苦しめる様なものかも知れないが、これでも生れゝば人一人、無殘ご殺すは餘りではあるまいか、お憎いながらもお父様には初孫、世間への義理よく、產んだとは被仰るまいが、心の中で喜んでは下さるまいか、況て妾には、妾にはどうしても、駒井様を露探、なぞとは思へない、憲兵のいふこと、掛札様の被仰ること、新聞へまで出ることに、萬に一、虚言間違ひのあらうとも思へないが、曩日お花のいつた通り、若しや裏に裏があつて今の惡名が贓ては名譽に變るのではあるまいかとも、思はれることがないでもないに、然れを今早まつたことをして、後日で申譯のない様なことがありはしまいか、

妾の氣の所爲かは知らぬが、どうもある樣に思はれる、また、假令其樣なことはないにせよ、假令駒井樣が眞實惡人であつたにせよ、妾は最う駒井樣の妻、此の兒は駒井樣の遺孤、生れたら彼のお顏にも似て居やうに成長つたら彼のお聲にも似るだらうに、然れを此のまゝ、顏も見ずに聲も聞かずに、享けた壽命を無理に縮めて慘酷らしく、エ、何として〳〵、妾ヤ蛇ぢやない鬼ぢやない、どうして可愛いこの塊肉が……といつて、左樣かと被仰るお母さんぢアなし、……仕方がない、惡いことだが當座逃れに、秘せるだけ秘すより外はあるまい。

浪子は怖々顏を上げた。

『お母樣、誰からお聞き遊ばしたか存じませんが、妾は……』

『エッ何だとねッ』

霹靂一聲、お杉は眼を吊り上げた。

『赤兒なんか出來ないとおいのかいッ』

『ハイ』

纖子は、斯うも憎いものだらうか、お杉は切齒の音をさへ立てた、拳をさへ顫はした。

『よく〳〵、……お浪ッ、お前は妾を馬鹿にして居るんだね、妾を盲目だと思つて居るんだね』

『アラ飛んだことを！』

『何がアラだい、何が飛んだことだい、どうせ露探を情夫に持つ位だから、親を馬鹿にするのは屁とも思ふまいが、妾アまだ、お前に馬鹿にされる程耄碌はしないよ强情を張るならいつて聞かせるが、お浪、お前が昨日お花に買はせたのは、彼品は何だい、紅と白の木綿は、彼品は何にするんだい、繻帶にするのは彼品とは違ふかい、知るまいと思つて妾を馬鹿にして！　眞實に此樣な、憎らしい奴ッちアありやしない、お浪、最う强情の張り樣はあるまい、サッ、其藥をお呑み、其藥を呑んで

露探の胤を墮胎してお了ひ、お呑みといふに呑まないかいッ』

ア、最うどうすることも出來ぬ、寧そ呑んで此の兒を殺して、駒井樣へのお詫に、妾も死んで了はふか、掛札樣もお父樣も、國の爲め死んではならぬと被仰るけれど夫に棄られ、世人に笑はれ、そして我が子を殺して、それで自分は死んでならぬとは、妾は此樣にしてまでも、國に盡さねばならないのだらうか！　不義の天罰は此樣にまで慘酷いのだらうか！　ア、最う忌々、忠義が何であらう、不義が何であらう、死んで了へば罪も消る道理ではないか、お父樣恕して下さい國の爲め、お父樣の後日の御難義、其も此も知らぬではありませんが、妾には最う我慢が出來ません

どうかお慈悲に死なせて下さい、この兒のことをお耳に入れないのが、せめてものお詫です、どうぞ死なせて下さい、妾は死にます。

お杉は焦れた。

『コレ、呑まないかよッ、呑まなければお父樣に左樣いつて』

『ア、もし、お母樣……』

『では呑むかい』

浪子は顏を上て屹となつた、最うお杉を怖れはしない。

『ハイ、呑みます、呑んで御覽に入れましやう』

藥を取り上げた。

（十）

晝の上天氣が夕方から變つて、しんみりと春雨が降り出した、今は最う十一時、寂として何の音もない。

心を細めた臺洋燈を枕頭、床の山水、受塵の花鳥、夢の樣に霞んだ中に、一目には花籠かとも見える、紅入り友染の夜具に半身を埋めて、雪の肌、玉の腕、其も寢衣の滑るに任せながら、右に、左に、緋總の枕を軋らせて居るのは、思ひに惱む浪子

である、彼は墮胎藥を呑んだであらうか。

幾らどう考へて見ても、妾にはどうしても、是が未練といふのかも知れないが、其様なことをなさる様な方とは思へない、また、曩日黑澤とお母さんとの話に、神戸までの切符を買つて汽軍へお乘りなさる所を、確かに見た人があると、話して居たのを聞いたことや、お訣別の時に被仰つた、氣にかゝる彼のお言葉を、考へて見ると、若しかしたら、現在が眞實かとも思はれるけれど、駒井様の彼の御氣性といひまた、掛札様のこの頃の御様子といひ、先を潛つて考へて見ると、お花のいふ通り裏に裏があつて、敵も味方も欺す様な、難し役を首尾よくお遂げなすつて、今に目出度く歸つて被來る様な氣がする、どうも左様思はれる、若し左様であつたらどうだらう！　家の恥辱どころか、この上もない名譽！　お父様のお喜びは無論のこと、妾はまア何様に嬉しいことだらう、何…に肩身が廣くなることだらう、左様なつたら、失禮なことをいふ様だけれど、お母さんはまア何様な顏をなさるだらう

二言目には露探々々と被仰つた彼のお口で、眞實に何と被仰るだらう！　そして妾もこの兒を產んで、オヽこの兒！　妾はまア、大事のこの兒を墮胎すなんて！　彼の時は悔しいので、つい其様な氣にもなつたのだらうが、若し彼の時掛札様の御入來がなからうものなら、お心あつてかどうかは知らないが、若し彼の藥を飜して下さらなからうものなら、今頃は最う!!　アヽ、思ひ出しても慄とする、明日お花に聞かせたら、何様に驚くだらう、何様に怒るだらう、併しこの兒の壽命があるだけでも屹度駒井様が歸つて被來る前徵に違ひない、アヽ、嬉しい、此様な嬉しいことはない。

浪子は感極つた、何を拜むといふでもなからうが、床の上へ端座して伏し拜んだ、此の誠意は如何なる神でも嘉し玉はぬ譯には行くまい。

天地愈よ寂莫として、伏し拜んだまゝの浪子は、己が息の通ふ音をさへ聞き得るのであつたが、この時不意に、部屋の裏手の熊笹か、風かあらぬか、珊々と鳴つたと

思ふ間もなく。

『コラッ』

『待てッ』

一聲二聲、靜けさを破つて鋭く響くと、續いて聞える五六人の揉み合ふ足音。

浪子ハッと驚いて顔を上げたが、隙さず胸に閃くは、毎夜缺かさぬ憲兵の巡回、その憲兵と爭鬪ふは何者？　若しや！

夫の大事！　猶豫はならじ、立ち上る裳裾を我と踏んで、前へバッタリ。

『エ、氣が急くッ』

またも屋外の聲、

『默れッ、露探ッ』

浪子は半狂亂、脛も顯に、駈け寄つて小窓の鎖鐵、ガチリ、力に任せて引き開ければ、

雨は何時か歇んで、明月一輪、萬頃の茫隴新に雨露の惠みに浴して、風に戰ぐ葉末に珠を散す中を、早や彼方へ十步餘、嚴かしい憲兵に圍まれて、後手の力なげにも引かれて行くのは、月明に紛ふ方もない黑澤才二であつた。

お花のいつた、氣味の良いことゝは是れか、

『オホ、』

浪子も遉に胸が涼いたらしい。

笑至や、才二はお花に計られたのである。

※　※　※　※　※　※　※　※

滿州名物、凍つく樣な烏拉爾颪に吹き捲くらした糠雪が、神の代から降り續けてゞも居るかの樣、山といはず、川といはず、形体のある總てを埋め盡して、見渡す限りたゞ是れ白皚々たる中に、此處は哈爾賓から吉林に通ふ間道を、たゞ一騎、鞭に拍車に馬足を伸して、既や暮れかゝる行手を急いで居る。

露西亞か日本か、見分くべき服章は雪に包まれ、逃るか追ふか、一騎なれば其も分らず、たゞ防寒外套の頭巾眉深に顏を隱し、毛革の長靴双の鐙を踏張つて、三尺何寸軍刀の鞘に馬の太腹叩かせながら、山川溪谷幾十里、飛び越え乘り越え後にした道程は、雲と吐き霧と吹く馬の鼻息に知れて、遠の四脚もこの上三里とは續くまじと見ねたが、騎者は必得ある武士か、道の迂曲に沿つて森蔭にかゝるや、忽ち手綱を控へてひらりと飛び下り、急きに急いて今までの樣子は何所へやら馬の平頸輕く叩いて劬りながら、轡を銜つて靜かに歩ませた。

雪は枝頭を飾つて陽春を欺くなぞと、其は風のない南方での詩人の戯語、須彌山上の阿修羅王が帝釋天を惱ます魔風かとも怪しまるゝこの烈風に、何條枝頭に雪の留まるべき、寒骨稜々たゞ參差相摩するのみなる森の蔭、人一人、馬一頭、人語らず馬嘶かず、肅々として進むのであつたが、命のまゝに走つた苦しさに喘ぎながらも馬は主を懷かしむかの樣、汗に濡れた首を伸して、憎げのない顏を騎者の腕に擦りつけて居る。

頼むも頼まるゝも今はこの馬一頭、騎者も遠に不憫の加はるのであらう、またも平頸二つ三つ叩いて、

『コレ、よく走つて呉れたのか、乃公が任務を遂行られるも貴樣のお影じや、併しまだ走らんけれアならんぞ、走つて呉れよ』

頼む樣にして、馬の顏を見返つたが、この聲、この顏、騎者は正しく駒井中尉であつた。

折から森蔭を外れて、また廣野の糠雪を横ざまに吹きつけられる途端、風を渡つて耳に響くは、戛々として相擊つ馬蹄の音、ハッと驚いて瞳を放てば、道の迂曲こそあれ、直徑には二町と距れぬ背後に迫つて、二十騎を下るまじと思はるゝ哥薩克騎兵の一隊、斯くと見て中尉。

『來たか！　露兵ッ』

一聲叫んで、ひらり鞍上、跨がる脚に拍車の一撃、まなこも雪を蹴立て、奮進。

なれど、敵もさる者、世界に名を得た哥薩克馬兵、馬の足を遲緩しと思つたか、馬上ながらの手練の射撃、釣瓶下しに浴せかけた。

最早や是れまで。運一つ！　右に、左に、耳を掠る銃丸の雨を浴びながら、中尉は鞍に身を伏せた。

走る互の全速力に優劣はあるまいが、銃丸の雨、其を避る傘もないこの廣野に、何時まで濡れずに居られるものではない、果然、中尉の從者は悲鳴を揚げた、急所を擊たれたのであらう、一度は高く躍り上つたが、其が最後の活動であつた。

墮力の爲めに擲出された中尉は。

『殘念ッ』

起き上りさま腰の軍刀すらり引拔いたが、倒れた愛馬を早即の楯に、敵を睨んで屹と身を搆へた。

『サア來いッ。塵殺だッ』

霏々として舞ひ、紛々として飛ぶ雪中に、殺氣迸る秋水三尺、渾身の勇氣を十指に罩めて、猛然敵を迎へ待つその威風、惡鬼羅刹と雖とも、容易には近づき難く見えた。

成らば生檎りたしとの顯ひか、敵は射擊を廢めて突進した、一瞬また一瞬、一秒また一秒、空を蹴る馬蹄は二町の距離を寸時に縮めて、先頭の一騎は既や咫尺の間に迫つた。

紫電一閃、殺氣は空に交つた。

『己れッ』

中尉の一喝、劍花前に散るよと見れば、先頭なる一騎の馬の太腹、八斗の血潮を雪に注いで、騎者諸共横倒し、隙さず躍り越えて横に薙げば、次の一騎は膝の關係を打ち離されて、騎者は耐らず逆落し、主なき馬は跳て狂つて、味方の中を縱横無盡

に暴れ回る、中尉はこれに氣を得て、當るを幸、眞額梨割車斬、人と馬との嫌ひなく斬つて斬つて斬り捲くる、なれど敵も名に負ふ哥薩克兵、味方の怪我に氣を勵まし、手練の手綱に馬を鎮めて、拔き翳す軍刀は風に亂るゝ篠芒、中尉を目がけて一度にエイと斬り下す。

傍に見る眼の耐らず。

『アレーッ』

我と我が聲に驚き覺めれば、浪子は夜具に身を埋めながらも、總身に氷を浴びた樣の冷汗、ホッと苦しい息を吐いて四邊を見回すと、最う何時であらうか、屋外には庭の孤松が折柄の風に鳴つて、夢に見た滿州の荒野に立つて居る樣な氣がまたもする、心細さに驅れて洋燈の心を捻上げた。

（十一）

道のお移をして慰かしめ、藤右衛門をして訝らしめ、そして浪子お花の兩人をして良い氣味と囁き合はしめた、露探の嫌疑ありとしての黑澤才二の拘引はまたも、少からず內川村の村人に苦痛は間もなく、一大歡喜とは何、其は、待ちに待ち搆へた、哈爾賓攻擊の捷報である。

一大歡喜に依つて忘れらるゝことなつた、

無論この土地で發行する新聞紙はない、東京の新聞紙がこの內川村へ入るのは、早い時で午前十時前後であるが、才二が捕縛された日の翌日、午前十一時と云ふ頃には、早くも村役場の門へ日章旗が交叉されて、これに做つた人々の家には『海陸軍萬歲』の提燈をさへ添へられた。

何といつても敵の大策源地、其を攻擊して大勝利を得たといふのだから、幾ら沈鬱み切つた一門でも、是ればかりは浮き立たない譯には行かない、お鍋李助を始め、この家の日頃の陰氣に氣を腐らせて居た雇人等が、此處ぞとばかりに一時に氣を得て、誰憚らず四斗樽の飲口をキユウといはせる位はありさうなこと、己が部屋に閉

居つてばかり居た藤右衛門も、その日からは相手欲しげに、家の中を歩き出すといふ有様で、火の消えた様になつて居た高山家も、どうやら人聲が聞え始めたが、これにも増して元氣づいた様に見えるのは浪子である。

お花と對座ひなどら。

『ねえお花、戰爭のあつた日を筭つて見ると、丁度妾が彼の夢を見た日に當るし、矢張り駒井様は間諜とかにおなりなすつたので、そのお影でこの戰爭が勝利になつたのぢアあるまいか、とも妾は思ふんだよ』

『左様でございますとも、屹度正夢なんでございますよ』

浪子は、さりながら、また思ひ惑ふ様、

『だけれども、眞實に正夢といふことがあるものかねえ』

『ございますとも！』

『ぢやアお前も見たことがあるの？』

『まだ見たことはございませんけれど』

『アラ！　ぢア氣安めをおいのだね』

『とう致しまして、氣安めなんて、其様なことはございませんけれど、妾は駒井様の御氣質をよく存じて居りますから』

『其は平素おいのことぢアないか！』

浪子は恨む様、また詰責める様にいつたが、今度は獨語の様に、

『だけれど、彼を正夢だとすると、其ア最う露探だの、國賊だのといはれるよりか勝だけれど、眞實に彼の夢の様なことがあつたのなら、幾ら駒井様がお強くつても此方が一人で先方が二十人だもの、ア、思ひ出しても眼が眩る』

兩手で顔を抑へて打ち伏した。

お花は慰め様がない、昨今折角お元氣が出た所を、と思ふけれど、大概の慰籍の言葉は吐き盡して居る。

すると重い跫音が部屋の外へ近ついて、靜かに襖を開けたのは藤右衛門である、見ると、先刻までの元氣づいて居た顏とは、全然別人の樣、蒼ざめた中に自然と憤怒の相恰が見えて、眦さへも吊り上つて居る、たゞ事ではあるまい。

お花が一禮して退かうとすると。

『お花、侍て、お前にも聞かせることがある』

驚いて仰ぎ見る浪子に一瞥を與へて、藤右衛門は兩人の間へ座を占めた、手に何やら紙片を持つて居る。

此の樣子に先づ斗胸を衝いた浪子、またも何事の出來か！　氣味の惡さに自然垂首る。

屋外は花につき物の烈風が、どうやらまた雲をさへ呼び出して、今夜あたりは一暴雨來さうな空模樣、半分開けた小窓から生暖い空氣が、時折風の工合で菜の花の香を吹き込んで、今日はまた其が忌に胸惡く感じられる。

敢て焦らすのではない、胸が塞つて口が聞けないのだ、呼吸の數なら二三十、藤右衛門は默して垂首れて居たが、漸う口を開いた。

併し極めて重々しい口調、

『お浪、今度の大勝利は最う知つて居るだらう、最う新聞で讀んだらう、哈爾賓といふのは、日本でいへば宇品、佐世保、といつた樣な、敵に取つて大事な所、其を日本軍が攻めて、見事に占領したのじや、此紙はその號外じや、その公報と書いてある號外じや、このまゝ碓子を嵌めて、額にしても立派ではないか、その立派な號外に、これ見ろ』

藤右衛門は手にした號外を投げ出した。

『國賊駒井中尉と書いてあるではないか』

『エ、ッ』

浪子とお花は今更の樣に驚いた、同時に叫んだ、一齊に顏を上げた。

『まだそればかりではない、先登第一の功名者村山上等兵、と書いてあるではないか』

『ヱ、ッ』

兩人はまた叫んだ、がその號外を見やうともしない、たゞ驚愕の眼を藤右衛門に向けてゐる。

『どうじや、お浪、何萬枚となく印刷で振り撒いたその號外、假令讀む人が、皆が皆お前との關係を知らぬまでも、彼の當時詳細く書いた新…もあるさうだし、國賊に迷つた女、その女の親といふことがまた人の口を傳ふではないか、假令額にして懸けて置かれずとも、その號外のある限り、否、反古になつて紙屑籠に入つても、日本人が皆忘れて呉れない限り、高山の家は國賊の緣類として、永く世の除外物にされるではないか、現に其所にあるその號外も、横須賀までわざ〳〵買ひにやつたとかで、群長めが持たして寄したのだが、これが最う俺への面當ではないか、それ

に引換へて春吉の功名、お浪、お前は最うお花に合せる顏もあるまいが！』

藤右衛門は、最う泣き伏して居る浪子を悔しさうに、熟と見詰めたが、氣を換へた樣にこれも、最う貰ひ泣きをして居るお花に向つて、

『お花、俺はお前に面目ない、お前が羨ましい、お前は天晴な亭主を、持つたのウ號外を讀んで見ろ、先登第一の功名者！　聞いても神氣が快いではないか、お前はさぞ嬉しからう俺の家來、なぞといつては、世間が最う承知しまいが、俺も嬉しい心からお前を祝ふ』

夫の功名、他人に勝れた功名、樣しくないことのあらう筈はないが、この場この時斯ういはれては、尙更浪子の胸中が察しられる、何と近事のしやうもない、お花はたゞ頭を下げて、感謝の意を表した。

藤右衛門はまた悔しさが胸に衝き上げた樣いふべからざる、苦痛の色を浮べて、まれも浪子の方へ向き直つた。

『お浪、俺は最う、自分で自分に愛想が盡き果てたわい、昨日までは、彼程新聞に書かれながらも、彼程掛札さんにいはれながらも何所やらにまだ未練が殘つて、口ではお前の未練を叱つて置きながら、心では、彼の時掛札さんが、參謀本部から即刻、船客の乘下に嚴しく注意する樣にとの電報を打つたから、一歩たりとも海外へ出られる筈はない、必ず近々に捕縛されるに定つて居る、と被仰つたにも似ず、二三四月と經つて今日まで、其樣な大罪人が就縛らずに居るといふのは、ハテ不思議なと思ふ心の隙へ、若しやの疑念が首を出して、お花のふい通り、敵も味方も共に欺く爲めの手段かとも、慾目からつい思ひ込んでも見たがその號外で見ると、なんのこと！　就縛らなんだは此方の迂濶、何所からとうして逃げたか、夙の昔に露國へ渡つて、今では露國の士官になつて居るさうじや、悔しいではないか、憎らしいではないか、併し、彼奴の不忠が反つて日本の僥倖になつて、其がため勝利も意外に速く得られたらしいから、是がせめてもの腹癒せじや』

夫の不忠が日本の僥倖とは？　浪子は涙ながらの訴しみの顏を上げたが、藤右衛門は其をくいと見下して、浪子の爲めの說明は與へんともせず、何思つてか、急に顏の恐ろしさをさへ加へた、聲も自然と鋭くなる。

『お浪、濟んだといふても詮がない、最ういふまい、が、一言いふて置く、よく聞けよ、決して忘れてはならぬぞ』

浪子は藤右衛門の聲に壓されてまたがつくり、垂首れた、お花は其を痛はしさうに見遣つたが、その眼を藤右衛門に向けて心もとなささう。

『外でもない』

藤右衛門はまた重々しく言葉を切つて、

『お前ばかりか、俺までが、否、お花までが、揃ひも揃つて三人が、豈夫と信じ、若しやと侍つて、理屈の他の未練を殘した駒井中尉、その駒井めはなア、思へばよくも見損つたものだが、眞實國賊であつたのぢや、賣國奴であつたのじや、露探で

あつたのじや、否、愛う日本人ではないのじや、逃げ出しをつた彼の日、お前にいひ置いて行つたとかの、譯の分らぬ謎語みた樣な壓語は、虚言じや、彼ア虚言じやお前を魅す爲めの虚言じや、何の！　腸まで腐つた彼奴に、間諜の役が勤まるものか、つもつても見ろ！』

たゞ一言といふ、約束であつた藤右衞門は、感情に驅られて、また罵り始めた、が其と心づいたらしい。

『イヤ、最う何も箇もない、お前も最う愛想が盡きたらう、諦めがついたらう、假令盡きて、竭きなくても、ついてもつかなくても、高山の家が無理に竭かさせる、無理につけさせる、お浪ッ、最う駒井とは何でもないぞ、赤の他人だぞ、未練を出すことは決してならぬぞ、この上は、何事もたゞお上の命令に從ふのがせめてものお詫、最う露西亞と日本、萬に萬來る樣なことはあるまいが、萬々一お前の愛に引かされて、忍んでゞも來る樣なことがあつたら、その時こそは、掛札さんの御命令通り、必ず密告するだぞ、悟られぬ樣にして俺に知らせるだぞ、その場になつて未練がましいことがあつたら、最うこの俺が、承知せんぞ、よしか、確と申し渡したぞ』

言葉の通り、藤右衞門確と申渡した、氣が立つて居るからであらう、返事のないのに焦立つた。

『コレ、お浪ッ、何故道事をせぬ、俺のいふこと不承知か、親のいふこと背く氣かコレ、返事をしろッ』

左樣は行かぬ、外のことゝは譯が違ふ、左樣急に返事が出來るものではない、胸に手を當て頭のまだ禿なんだ己が三十年の昔日を考へても見よ、戀の抑もは其樣なちよろつかなものではあるまいが！、さりとは不粹な藤右衞門、纖弱い女の胸には堪へ切れぬ苦痛を受けて、浪子はたゞ泣きに泣くのである、併し浪子にはお花といふ親切女がついて居る、お花は藤右衞門の顏色を讀んで、兎に角、と思案した。

浪子の傍へ摺り寄つて、

『お嬢様、何故御返事を遊ばさいないのですよ、遊ばせよ』

聲に隱れて浪子を小突いた、小突かれて、この『遊ばせよ』が浪子によく効いた、

『妾がついて居ますから御安心遊ばせよ』と聞えた、命の如く遊ばした。

『アイ』

是はお花に答へたのだが、藤右衛門の方が應じた。

『どうじや、俺のいふことに合點がいつたか』

『ハイ』

『確と諦めたか』

『ハイ』

いはゞこれも意地、敢て心の底までを問ひ糾さうといふのではない、藤右衛門は浪子の返事に滿足したらしい、立ち上りながら。

『まアその號外を見ろ、忌といつても諦めずには居られないわ』

是が捨白詞だ、藤右衛門は部屋を出た。

兩人はその後姿を見送つたが、其が見えなくなると、浪子はまた疊へ打伏した、お花は俛首れた。

折から、またも小窓から颯と風が吹き込んで、兩人の間の號外を、彼彼の壁際へ吹きつげたが、浪子は一寸と見たばかり、お花も取らうとはしない。

（十二）

屋外に吹き荒む風の音を現に聞いて、浪子は何時か氣も恍惚、人心地をさへ失ひかけるのであつたが、途端に烈しく吹く風に煽られて、カタ〳〵と鳴る障子の音に呼び覺されて、ハッと正氣づいて重い頭を擡ると、屋外は今にも降り出すのか、一入陰氣に黑む、部屋の中にこれも、俛首れたまゝのお花が、今にも消ゆて失なりさう

な姿。

浪子は心細さに驚られて、我にもあらず號外を取り上ると、或る何者かに役せらるゝかの樣、知らず〳〵眼を辿らし始めた。

お花も漸う顏を上げたが、感極つてはいふべきことゝてもなく、たゞふら〳〵と誘はれて、浪子の側から同じく號外を差し覗いた。

號外は左の三項であつた。

○哈爾賓總攻擊公報

(〇月〇〇日　〇軍司令官〇〇中將報告)

本軍は豫定の如く〇〇及び〇〇方面より歸來せる兩混成枝隊と〇〇に於て合同し今曉四時三十分を以て豫期の運動を開始す此時降雪激き爲め頗る遠望を碍げ隨て砲兵の射擊に不便なりしも亦よく敵眼を免るゝを得て所期以外の地點に底るまで咸默し

て近接するを得たり

敵の兵力は將校斥候の報ずる所に依れば西伯利亞銃歩兵三箇旅團、ザバイカル騎兵二箇聯隊、西伯利亞砲兵二箇旅團並に工兵二箇大隊にして兵數に於ては我を凌駕するの觀あるも是は遼陽奉天府等の敗兵を收容しあるは無論にして隨つて士氣の沮喪せるは明白なるを以て本官は我が軍の武勇を賴んで猛進するの決意を爲せり

街城を距ること三千米突に地點に於て始て敵の發見する所となり依て直に射擊を開始す砲戰三十分にして敵は城内に退却したるを以て小銃の有効射界に進み歩兵をして城外の鐵堡内に殘留せる敵の歩兵並に屢々左翼を迂回して我が背後に出んとする敵騎に當らしめ砲兵をして城内に間接射擊を行はしむ然るに須臾にして城内の火藥庫に命中したるものゝ如く强大なる爆聲と共に盛に白煙の上騰するを認め且敵軍漸く動搖するの觀あり依て此機に乘じて直に右翼の第〇聯隊をして突擊を試ましめたるに同聯隊はよく敵火を冒して突進せるも敵亦死力を盡して之に十字火を加へ爲に

同聯隊は城壁下に肉薄したるまゝ突入する能はず乃ち牽制運動として第〇〇聯隊をして中央突擊を行はしめ敵の火力の分るゝを待つて更に第〇聯隊の二箇大隊をして第〇聯隊を援けしめ且砲兵の急射擊を加へて一層敵を擾亂せしめ遂に目的を達して城内に闖入するを得たり此に於て全線に突擊を命じ本官は豫備隊の全部と共に第〇聯隊に續て城内に突入したるに敵は背後なる城門より逃走し我が追擊を蒙りつゝチゝハルに通ずる街道を不規則に退却せり

攻擊開始より戰闘終結に至るまで僅に一時間半如斯き少時間を以て此勝利を收め得たるは實に本官の意外とする所にして一に陛下御威德の賜物と信ず

〇國賊駒井中尉の消息

——滑稽的なる哈爾賓陷落の遠因——

（韓國京城本社特派員發）

今猶奉天の野戰病院に收容されたる。哈爾賓攻擊に參與して負傷せる某少佐某の名…ある創痍と共に、吾人に一大快感を與ふべき消息を齎せり。

少佐の言に依れば、吾人がその肉を喰はんと欲する、彼の國賊駒井中尉は、如何にして嚴重なる我國警吏の網を免れ出でけん、旣に露國に投じて、同國陸軍の一將校として採用せられ居たる由なるが、征露幾萬の將士をして思はず噴飯せしむるの滑稽は、露將クロパトキンと彼との間に演ぜられたり、そは、連戰連敗の悲運に依つて意氣銷沈せるクロパトキンも、策源地たる哈爾賓の防禦に對しては、流石に自國安危の懸る所と覺悟せしにや、幕寮と共に一向らその防禦計畫に苦慮せる時、中尉は如何にして探知しけん、我日本軍の攻擊計畫を具して、自己の意見を獻じたるに、平素中尉に對して、日本の間諜ならずやとの疑ひを抱くクロパトキンは、その餘りに日本的なる攻擊計畫に對して、益々中尉の本心を疑ひ、遂に、日本軍の攻擊計畫は全然中尉の言に反するものと推し、これを基礎として自己の防禦計畫を策定せし

かば、反つて反對に出たる日本軍の攻擊に對しては、何條一堪りもあるべき、彼は爲めにまたも守地を棄て走るの悲運を繰返せしなり云々。

此に依つて見れば、司令官の報告中、如斯き少時間を以て此勝利を收め得たるは實に本官の意外とする所にして云々とあるは、蓋し、陛下の御威德並に我が將士の武勇に依るは勿論なれども、敵軍の此の滑稽も亦、確に之が遠因を爲せるものにして敵將クロパトキンの苦衷や憐むべしと雖も、天神地祇にも見離されたる露國の運命は、吾人その歸着する所を推斷するに苦しまざるなり

○先登第一の功名者

――沈着から出た頓智――

（同　上）

哈爾賓總攻擊の經過は司令官の公報の如くなるが、吾人は この攻擊に就いて、また

も傾聽すべき一佳話を得たり。

全報中の第〇聯隊に加はつて突擊を行ひ、その際右大腿部に貫通銃創を受け、前項〇〇少佐と共に當地病院に收容されたる、一等卒〇〇〇〇氏は語つて曰く、

小生の創ですか、大腿部の貫通銃創です、ナアニ、自慢する程の怪我でもありません、小生の勳功？　アハ、、、、怪我をする樣な意氣地なしに、勳功なんかあるもんですか、それよりか、是非新聞に書いて貰ひたいのがあるです、どうか十分に書いて下さい、是は小生と同中隊の上等兵で、村山春吉といふのですが、是等は確に金鵄勳章ものです、御承知の通り、彼の時の最初の突擊には、敵の火力がまだ十分に衰へて居らんかつたものですから、突擊はして見たもの、、先方へ行き着いた時には、十字火の爲めに大分殺れました上に、何しろ彼の城壁ですもの、仲々直ぐ攀登る譯には行きません、所で仕方がありませんから、城壁にぴたり膠着いて、增援隊の來るのを待つて居たですが、御存じの通り、城塞には皆な側防といふ奴があつ

て、其所からどし〳〵撃たれますから、幾ら膠着いても駄目です、たゞ氣安めだけです、それで居て此方からは些とも撃てないのですから、何のことはない敵の射撃演習の標的だ、堪るものですか！　ばら〳〵倒されました。所でこの村山上等兵で す、どうでしやう！　平氣な顔で煙草を飲み始めました、それもまアいゝです、が呆れましたね、その城壁の石崖の數を算へ始めたぢアありません、石崖の石の數を首で勘定し始めたぢアありません、小生始め思はず顔を見合はせました、併し其は石の數を算へるのぢアなかつたです、左樣斯樣する間に援隊が來ました、最う他人の石の數の詮議ところぢアありません、ソレッといふので、遮に無に石崖へとッつきました、所が攀登られゝばこそ、仲々どうして！　石の隙間といつた所で一寸か二寸、其も都合のいひ所にばかりありアしない、加之に押す押される、劍はある銃は背負つて居る、其で鉄裏の軍靴と來て居るんですもの、宛然硝子製の捕蠅器の中へ飛び込んだ蠅の樣なものです、一足かけるとばたり、二足かけるとずるり、幾

らツア〳〵吶喊したつて、埒は明きません、するとどうでしやう、村山上等兵だけはずん〳〵攀登つて行きました、そして登り切るが速いか、城壁の上からワア〳〵いつてた露兵を、無論銃は背負つて居るから直ぐ役に立ちません、突然五六人突き落して置いて、直ぐ縄梯子を下したのです、尤も此品は斯ういふ時には皆ゝ用意して居ます、サア一本でも縄梯子が下りたとなると最う蠅の眞似はして居ません、珠婦纖ぎになつて其を登つて、登り切ると同じく五六人突き飛ばして、銘々また梯子を下します、見る間に縄蹇廉の樣なものが出來上りました、アハ、、、、後は最うお話しするがものはありますまい、所で落話の樣ですが、村山上等兵がこの先登第一の功名を遂げたのは、全く煙草を喫みながら呆然石崖を眺めて居たお影で、首を動かして居たのは勘定をするのではなく、足を掛けて攀登る空隙の順序を工風して居たのです、アハ、、、、併し是は、危險な場合に臨んでも沈着して居たればこそ出た頓智で、聯隊長も非常に感服して、直ぐ司令官へ報告されたさうですから、

今頃は最う金鵄勳章を貰つたかも知れません、怪我？　どうして！　びん〳〵して居ましたから、この先また何樣な像いことをやるかも知れません云々。

因に記す、村山上等兵は曾て　前記駒井中尉の從卒たりしことあるやにて、氏ぼ出發に際して、始めて中尉の露探なるを知り、慷慨禁する能はず、此の行誓つて、金鵄勳章を得るにあらずんば、死して國賊の從卒たりし恥辱を雪ぐべしとて、その決心自ら他に異なる所ありし由なるが、今回果して之の功名を顯せり、一は將校にして露探たり、一はその從卒にして此の功名を成す、吾人は今に及んで、駒井中尉を惡むの念一層深きを覺ゆるなり。

浪子お花の兩人は默して讀み了つたが、浪子はまた更に潸々と泣き出した、お花はどうかしていひ慰めたくは思ふが、何といつてよいやら、遽には思案も浮ばない、否、幾ら考へても浮ぶ筈がない、此樣な場合には最う絶對的に、慰むべき言葉が世の中に存在しないのだ、ないものは幾ら考へても出やう譯がない、が人情は左樣したものでない、どうかして慰める言葉を搜出したい、どうかして慰めたい、どうかして、どうかして、とお花は思ふ、思つて焦りもする、併し、無は有を生せず、といふ理學の原則は、來ずともがなの此所までも來て居る、仕方がない、原則には服從しない譯に行かない、お花は口を噤んで居る。

反對に、浪子は何とかいつて貰ひたい、自分には何時も、何をいつても楽しく聞える、その聞える、その聞えるお花の聲で、何とか、何とでもいゝ、何とかいつて貰ひたい、いつてさへ呉れゝば、この胸中の苦痛が薄らぐ、時には泣かされるけれど泣かされてもいゝ、泣けば泣くで、またその中に他人に知れぬ慰藉が籠つて居る、泣かせてお呉れ、泣かせて貰ひたい、其方からいひ出して呉れなければ、此方からいひ出さなければならないが、其は困る、此方からはいひ出せない、妾にはいひ出せない、何時でも大底のことは、妾の顏色を見ていひ出して呉れるではないか、其を今日に限つて、意地の惡い！　妾の此樣に苦しんで居るのが知れないのか、妾の

此樣に泣いて居るのが見えないのか、お花、何とかいつてお呉れ、お花！　お花！
お花ッてばサア、浪子は心に悶ゑて、つい愚にも歸るのだ。
併し、この時の浪子の胸中には、是といつて纏まつたことを考へて居るのではない
號外のこと、駒井中尉のこと、藤右衛門のいつたこと、其等を考へて見たなら、た
い表面ばかり悲しい情けないと一口にいはずに、眞底眞面目になつて一生懸命に考
へて見たなら、仲々たい泣いたり、たい齧いだり、其樣なことをして居られる場合
ではないのだが、今はたい悲しい樣な氣がする爲めに悲しみ、たい氣が齧いで來る
爲めに齧ぐ、といふまでのことで、言換へれば、自分を絶望の淵に突き落さうとし
て、大手を擴げて待ち搆へて居る惡魔の樣な、駒井中尉の露探問題には、まだ直接
に關れて居ないのだ、少くとも吉野紙一枚を隔てゝ居るのだ、そしてその吉野紙を
透けて見える中の惡魔をたい、氣味の惡いもの、恐いものと思つて、見えても見な
い樣にして居るのだ、小供が芝居で幽靈を見せられた時の樣に、

併し、是は、哀悲の爲めに心が傷れて、常識も判斷力もなくなつて了つたからの、
一種變調の神經作用で、是が惡く變症れると發狂するのだ。

(十三)

風伯雨師の連合運動！　堪つたものでない、樹は倒れよ、家は飛べよ、と風が號ぶ
山は碎けよ、川は裂けよ、と雨が擊つ、天地は惡魔の口から吐く暗黑に包まれて、
函嶺から東は大暴風雨だ。
家ぐるみ、今にも凌つて行きさうな、この暴風雨の中に、最う十二時も打つたとい
ふに浪子はまだ起きて居る、泣いて居る、無論、小供ぢアなし、暴風雨が怖くて泣
くのぢアない、分明つて居やう。
不憫うに！　浪子は全く絶望の淵へ突き落されて了つたのだ、今までは落ちかけ
て居ながらも、藤右衛門といふ岩角や、お花といふ蔦蔓に縋つて、速く來て助けて

呉れる樣、早く來て引き上げて呉れる樣と、心に祈りながら、駒井中尉といふ救ひの手の出るを待つて居たのだが、救ひの手の代りに惡魔の手が出て、岩角を削り、藤蔓を切りして、とう〳〵突き落して了つたのだ、實に、無殘の極ではある。

疊へ擦りつけて居た前髪を上ると、眼は最う腫起つて、顏に一點の紅も認められない、其を洋燈へ眞面に向けて、丁子が出來たか、ちらつく火影を凝と瞶めたが、嚥てがつくり俛首れる、と鬢の解毛が、二三本頬を掃る、煩さうに指で搔き上てホッと一息其を動機に獨語。

『ア、ア、最うどうすることも出來ない、一度ならず二度三度、彼樣た確實な證據があつてみれば、どうしても事實としない譯には行かない、彼樣に妾の力になつて居て呉れたお花も、外に思ひ返しやうがなければこそだらう最う見離して了つた、妻の妾の慾目から見ても、最う頼みの綱のかけやうがない、ア、ア、駒井樣は眞實彼樣なお心におなりなすつたのか！、情けない御了簡を出して下すたではないか！

左樣とも知らずに、二人とない方の樣に思つて居た妾、は兎も角、お父樣の御無念彼の御立腹は無理もない、家の娘が惡人の妻になつたとあつては御先祖樣への申譯がなし、世間へも最うお顏向けが出來まい、お父樣のお胸の中は、さぞお苦しいことであらう、駒井樣がさぞお憎いいとであらう、併し、惡人であらうと、何であらうと、妾は最う駒井樣の妻、お父樣は、表向きの儀式をしなかつたがまだしもと被仰るけれど、假令表向きはどうでも、妾は最う駒井樣の妻に違ひない、然れを、最う赤の他人だ、愛想を盡して了へ、諦めて了へと被仰るのは、妾には些と御無理の樣に思はれる、其は最う、駒井樣は彼樣になつてお了ひなすつたのだから、この上どう斯うといふ願ひはないけれど、一旦夫と心に定めて、柔しく愛しがられた妻の妾が、何で愛想が盡されやう、何で諦めがつけられやう、況て、赤の他人に何でなられやう！　ア、思へば情けない、善惡共に夫に隨ふが妻たる者の道と聞くに、その夫に隨へぬのみか、妻の身として夫を欺し誘いて、憂き目を見せる爲めの誘鳥に

なるとは、國の爲めとはいへ、家の汚名を雪へ、爲めとはいへ、餘り情けない運命ではないか、餘り殘酷い呵責ではないか！　死んではならぬと被仰るけれど、死んでこの呵責を免れたい、死んで夫の命を救けたい、それにしても、萬に萬最う歸つて被來る氣遣はあるまいけれど、若し歸つて被來つたらどうしやう、今にも歸つて被來つたらどうしやう！　お父様は彼様被仰るけれど、夫を我が手に縛つて突出すなぞと、其様なことがまアどうして妾に出來るだらう？　といつて、突き出さなければ、お父様へ御難義が掛かるに違ないし、アヽどうしやう、どうしたらよからう！

それにまた、お別れした時の彼のお言葉を思ふて、妾の慾目かも知れないが、妾の自惚とかも知れないが、お父此の被仰る様な、妾を欺す爲めのお言葉とは、どうしても妾には思へない、何か譯がある様に思はれる、どうせ最う惡人におなりなすつたのだから、外に譯といつてはあるまいけれど『如何なる場合にも僕を信じて下さいと、被仰つたのは、妾を棄て下さらないからこその様にも思はれる、歸つて來

るのを待つて居ろとの謎の様にも思はれる、どうも左様思はれる、すれば、今夜にも歸つて被來るかも知れない、若し被つたら……、アヽどうしやう、どうしやう、……エヽ最う、妾は死ぬ、妾は死んで了ふッ！　お顏を見たつて、何時まで長くお傍に居られるではなし、といつて、お父様を棄て行く譯には行かず苦しい情けない思ひをさへした上で、夫の縛られるのを見るか、大事な親へ難義をかけるか、其様な忌な辛い思ひをするよりも、寧そ死んで了つたが勝、左様すれば夫の耳へも何時か入つて、不憫と思つても下さらうし、危い此家へも被來るまいしまた、お腹の中のこの子を夫にも見せないで、このまゝ一所に殺すのは不憫だけれど、駒井様が愈よ惡人と定つては尙更のこと、またお母さんが墮胎せと被仰るに違ひないし、その道壽命がないのだから、親子諸共死んだ方が、この子獨り殺すよりか、二度と彼の思ひをしないだけも樂、オヽそれよ、妾は死んで了はふ！』

浪子の顏には決心の色が動いた、立つて簞笥の抽出を開けた、取り出したは、備前

長船の九寸五分、座に復つて燈火に近く、鞘を拂つて裏表を返した、光芒陸離、底の紅龍の氣を藏して居る、凝と眺めたが、袖に拭つて鞘に納めて、身を伸して机上の硯取り下して墨すり流した。

紙に對して先づ涙、いひ置くべきことの數々、書き遺したいことの彼や此、胸に紛糾んで端緒さへも分らず、浪子は幾度か紙を裂き捨て後、辛うに筆の立度を定めたが、其も二三行また行き惱んで、悲しさばかりが胸に衝き上げて來る。

お父様、どうぞ恕して下さいまし、この浪はいひ様のない不孝女でございます、家の瑕をつけたまゝ、お父様のお顏へ泥を塗つたまゝ、十八年の養育の御恩、其も得送らずに、お年を召してのこの後の御苦勞、其の御介抱も能うせずに、お先へ死んで參ります、思へばたゞ御若勞をかけに生れた樣な妾さぞお憎いでございましやうさぞお腹が立つでございましやう、何とお詫の致し樣もありません、反つて受けた汚名の上塗りにこそなれ、死んで其を雪ぐ補足にもならぬ妾、死んでならぬと被仰

あのを死ぬのですから、いはゞ自分の勝手に死ぬのですから、自分の苦しみを免れたさに死ぬのですから、何で立派な死樣、殊勝な死樣といはれましやう、何でこれがお詫になりましやう、何で卑怯な自殺でないといはれましやう、然れを、卑怯な自殺と知りながら、お詫にならぬと知りながら、死んで免れずには居られない妾のこの苦痛、よく〳〵のことでございます、どうぞ察して下さいまし、察して恕して下さいまし。恕して死なせて下さいまし、お父様ッ、お願ひでございますッ、拜みますッ。

浪子は思ひ迫つたか、筆を棄て膝を捻つて、掌を合せて伏し拜んだッ、軈て、また筆を取り上げた。

書いては泣き、讀んでは咽び、血の涙の幾滴をさへ振りかけて、綿々として長い恨みを一尋に込めた、卷き納めて机の上。

死樣の醜いは恥辱と聞く、床に一縷の名香を薦かせ、解いて引けば颯と流れて長蛇

の吐く火焔とも見る緋の帶揚、雙の膝に二重二重堅く捲いて確と結んだ。

覺悟は定めた、最う思ふ所はない、心靜かに匕首の鞘を拂つた。

暴風雨は仲々歌む所でない、愈よ荒れに荒れて居る、程近くの大木が吹き倒された のであらう、凄じい音が大地を震はして、續いて、惡魔が敵を倒した勝利を祝する 凱歌の樣、ドッと吹く風が家の棟を搖つて、これに乘つて來る雨礫が割れよとばか りに戸を擊つ。

この物凄い眞夜中に、この物凄い音を屋外にして、泰然自若、平然亂れず、氷と光 る短劍を膝に立て、眼に色なく、耳に聲なく、薄暗い光を浴びて端座する浪子の 姿、何といひ回しだら、この光景が遺憾なく描き盡さるゝだらうか、如何なる畫工 如何なる文士を連れて來て覗かしても、此の瞬間以外に此の光景を保存することは 恐らく出來ぬ、といふだらう、若し强ゐて、是に對して影筆を取り上げる畫工があ つたなら、是に對して紙を展に文士があつたなら、此の兩人は自然を强ふるといふ

ものだ、自然といふ靈腕以外には、到底企て及ぶことの出來ない、大畫圖なのだ、 大文章なのだ。

死の神は刀尖を繞つて躍りつ狂ひつ、血に喝いた喉を鳴して、今にも喰ひつきさう 浪子の死は膝から喉へ一尺何寸、二尺と距れぬ間際まで押し寄せて居る、刻一刻、 瞬一瞬、危機は愈よ迫る、刀尖一たび動けば萬事休むのだ。

浪子の手は膝を離れた、スワ！

途端に、ホト〳〵と戸を叩く音が、風に紛れて聞えた、樣に思はれる。

浪子は上げ手を膝へ復して耳を澄した。

ではなかつたか、何の音も最う聞ゑぬ。

亂れた氣を鎭めん爲めの樣、浪子は暫時瞑目した、軈て眼を開いて、左手で衣襟を 寛げた、するとまたも、今度は稍や强く。

振り向いたが、たゞ其だけ、何の音とも分らぬ、或は手拭懸かも知れぬ。

『氣の所爲だらう、心の迷ひだらう』

呟いて、右手に匕首の柄、左手を袖口に纏んで刄へ持ち添へた。

『南無阿彌陀佛』

最後の眼を閉ぢて、心當に狙ひを定めた、間一髪、またもや戸が鳴つて、人の聲さへ聞えた。

『浪子さん、浪子さん』

低聲くはあるが二聲、而も確に駒井中尉の聲。

聞くと等く、浪子の体勢は崩れた、匕首は手を脱けて疊へ落ちた、狼狽て立たうとすると、膝の帶揚、解うとする、解けない、匕首執つて結目をざくり、戸の際へ身を轉がした、閉鑰の横木へ手をかけた。

折から屋外にまたも一陣、どつと吹く風の中から。

『浪子さん、開けて下さい、駒井です、開けて下さい』

駒井と聞いて我に復つて、

オ、この戸は迂濶開けられぬ、開けて内へは入れられぬ、開けて内へ入れたいが、開れば夫の身の破滅、入へばお父様にいはねばならぬ、いつてお上へ突出さねばならぬ、開けたいけれど開けられぬ、苦くとも夫の身の爲め、入れたいけれど入れられぬ、切なくとも妾の貞操の爲め、駒井様、歸つて來て下すつたお心は嬉しうございますが、どうかこのまゝ歸つて下さい其が反つてお情けです、歸つて下さい、どうか歸つて下さいまし。

浪子は眼に見えぬ手に突き戻された樣、たじ〳〵と後へ蹣けて、ばつたり舊の座へ倒れた。

ア、歸つて下さい歸つて下さい、早く歸つて下さい、斯樣いふ間にもお父樣が被來るかも知れません、お父樣が被來つては大變です、どうぞ早く歸つて下さい。

浪子は悶え焦つて、最う中尉の聲の聞えぬ樣にと祈つたが、屋外からは愈よ急。

『浪子さん、早く開けて下さい、他人に見られると困ります』

エ、他人に！オ、、左様よ！　屋外は憲兵が巡回つて居る、エ、最うどうしたらよからう！　屋内も屋外も同じことなら、寧そ入れて、一眼なりとお顔を見た上で、またよい分別を？　オ、其よ。

また駈け寄つて閉鎖を外して、音を偷んで静かに引けば、折からの雨が僥倖、濡れた闇の滑走よくも、雨戸は一枚開いて颯と吹き込む暴風、燈火を消してはと、浪子狼狽へて立塞がる夜暗の中、中尉は簑笠の百姓姿の鍬さへ擔いで立つて居る。

（十四）

百姓姿の簑笠刹ると、またも變つて商人風、端折つた裾を下せば羅紗の前垂、髭さへ奇麗に剃り落した中尉は、屋内へ入つて雨戸を閉めた。

浪子は中尉を座に引きながらその變つた姿に呆れ果てたが、世を忍ぶ身には成程と

首肯かれもして、其がまた情けなく淺ましく胸は迫つて先づ涙である。

中尉も浪子の窶れた姿を見ては、迫に萬感交も到るかの様であつたが、何か深く期する所あるもの、如く、懐かしげに呼びかけた。

『浪子さん』

浪子はこの聲に引寄せられた様、ついと寄り添つて、中尉の膝へ縋りついた、が、返事はない、恐らく口が聞けないのであらう、たゞ身を悶えて居る。

『浪子さん』

中尉は再たび呼びかけた。

浪子は心の稍や静まると共に、先づ胸に衝き上げて來るのは、悔しさである、怨めしさである、そして、妻に對しては如何なる場合にも柔しい愛撫者であるべき筈の夫に向つては、浪子に對しては事實左様であつた中尉に向つては、張り詰めた氣も自然弛むのであらう、心も隨つて年齢相應の無邪氣に復るのであらう、浪子は縋り

ついたまゝ、中尉の膝を小突いた、小突きさはした。

『駒井様、貴郎はまア！』

この一語、千萬無量の意味が籠つて居る、中尉は不憫しさうに、浪子の痩た頸を見詰めたが、軈て、その肩へ柔しく手をかけた。

『浪子さん、恕して下さい』

柔しくされると腹の立つものか、浪子は悔しさうにその手を拂ひのけて、

『エ、最う貴郎は、廢して下さい、此樣に窘めて置きながら！』

拂ひのけられて、取りつき端のないに困つた樣、中尉はその手を懷中へ挿しこんで稍や思案の首を垂れたが、思ひ定めたらしく、屹となつた。

『腹の立たのも道理です、成程貴孃を窘めたでしやう、否、確に窘めました、貴孃ばかりでない、お父樣も窘めました、就いては、今夜はそのお詫に參上つたのですから、どうかお父樣も此所へ呼んで下さい』

浪子は、お父樣の、一語で我に復つた、屹と心が締つた、中尉の身の危さに思ひ到つた、驚きの餘りの顏さへ上げた。

『まア飛んだことを！　憲兵の手が回つて居るのを御存じないのですか、父が知つたら直ぐ密告します』

『察告？　左樣でしやう、彼の御氣性だから密告なさるでしやう、併し、關心はんです、密告も承知です、一寸と呼んで下さい』

浪子は呆れて返事もしない、たゞ中尉の顏を瞶つて居る、中尉は其を微笑で見返しながら、

『浪子さん、貴孃が其樣なことをいふ樣になるのは、よく〳〵のことでしやうね、併し、僕が出發する時に何といひました？』

『エッ』

『如何なる場合にも僕を信じて下さい、といつたでしやう』

浪子の胸には忘れることの出來なかつた、昨日までは其を唯一の糧みにして居た、その言葉をまた中尉の口から繰返されたのだから、浪子は迷はずには居られない。若しやといふ念がまた首を上げて來る。すると中尉に對して面目ない、申譯がないといふ心も起る、が、あつた事實を考へて見ると、全く反對の證據になる、また、身に暗い所がないものなら、この暴風雨を冒して來る必要はない、といふ目前の證據もある、右思左考思案に餘る。

この時襖が開いて藤右衛門が出て來れば、立派な歌舞伎座式芝居になるのだが、左樣眺向きには行かない、藤右衛門は出て來ない。

中尉は浪子の顏色の動いたのを見て、その決心を幇けた。

『まア考へて御覽なさい、危險いと思へば、僕だつて歸つて來る筈はないぢアありませんか、然を斯うやつて歸つて來るからには、白晝公然と來られないだけの弱點はあつても、まさかにお父樣の御立腹を解く位の理由はないでないです』

いはれて見れば成程左樣だ、併しそれなら、此樣に迂遠くいはずとも、その理由といふのを早く聞かせたらよさゝうなものだが、中尉の了簡では、一つは、同じことを二度繰返すのが面倒なのと、一つは、浪子の心へ一時に激動を與へまいといふ、周到な注意なのかも知れぬ、一時に悲しみ、一時に喜んだ爲めに、女には度々氣絶するのがあるに考へて見ても。

浪子は、この言葉の尤もに思はれるのと、中尉の顏に不安の色がないのとに稍や安心して、何とはなしにたゝ心丈夫になつて、つい父を呼ぶ氣になつた、中尉の言葉に追ひ立てられる樣な氣がして、我にもあらず部屋を出た。

浪子が部屋を出て、一分經つや經たずに、足音荒く入つて來たは藤右衛門である、憤怒の色滿面に溢れて、手に刀をさへ提げて居る、浪子は父の氣色に驚いて、迫にまた不安の念を起したのであらう、心もとなさゝうな顏をして、刀の鐺を確と握つて居る。

藤右衛門は中尉の姿を見るや、立つたまゝに切齒しながら、

『ウヌ、國賊ッ』

礑と睨んだが、言葉を繼ぎ得ない、餘程激して居る。

中尉は莞爾と笑つて、姿勢を正した、胸をぐいと張つた、聲は凛として力がある。

『高山さん、その御立腹は御尤もです、併し、まアお座り下さい』

藤右衛門は中尉の威に壓された樣いはるゝまゝに膝を折つた、併し、息を彈ませて刀を確と引きつけて居る。

この先、中尉の言葉の出やう一つで、何樣なことにならうも知れぬこの有樣に、浪子は最う氣も上の空、父に知らせた不覺を悔る心の暇もなく、たゞはら〳〵そわ〳〵、右に左に、父と中尉の顏を見較べて、スワといはゞ、兩人の間へ身を投げ出さん覺悟の体である。

中尉は續けた。

『成程被仰る通り、僕は國賊です、新聞紙の書く通り、露探です』

『エ、ッ』

『何とッ』

藤右衛門は膝を進めた、其を遮る樣に、浪子も乘り出した。

中尉は其に動せず、更に續けた。

『その國賊、その露探が、御息女と或關係を結んだとあつては、一には、御當人の幸福を奪ひ、一には、お家の名譽を汚し、延いては貴下の恥辱、定めしお腹の立つことでしやう、是に就いて、御息女を汚したことだけは、僕も後悔して居ります、併し、濟んだことは今更致方もなし、一向らお詫をするより外はありません、と、斯う申したいけでは、厚顏しい男、無恥な奴と思召さうが、是には聊か次第のあることで、また、此の次第をお聞きに達した上で、重々の厚顏しいお願ひではありますが、斷然御息女を僕に下さる樣、と申しても、僕は今後とても日本に居られる身

体ではなし、また露國へ同道する譯には尙更行かず、たゞ公然とは、行きますまいが、せめて貴下からのお許諾を得て、手紙の往復に依つてなりとして、終生寂寞たる僕の不幸を慰めさせて戴き度いです』

中尉は此で先づ言葉を切つて、兩人の氣色を窺つた。

藤右衞門はたゞ最う呆れ果てたといふ顏、力抜けさへした樣で、刀も何時か手を離れて居る、が、浪子はこれに引換へてどうやら、嬉しさうにも見える。

『定めしお呆れになつたでしやうが、僕が露探になつた苦しい譯、先づ一通りお聞き下さい』

中尉は徐ろに語り出した、其は斯うである。

中尉は、自らもいふ通り、眞實露探であつた、併し、其は露國の爲めの露探ではなくて、日本の爲めの露探であつた、といふのは、お花が先潛りをして、或る程度まで推察し得た通り、憲兵が中尉を逮捕に向つたのも、また中尉の居宅を宿舍として

内川村を監視したのも——憲兵自身は左樣は知るまいが——また掛札大尉が中尉に欺されたといつたのも、是等は皆な敵を欺く爲めに味方をも欺く爲めの手段であつたので、參謀次長戸間中將、掛札大尉並に常事者たる駒井中尉、その他二三高級參謀官のみの合議に成立つた、秘密中の秘密ともいふべき、大計畫であつたのだ、所で中尉が露將クロパトキンに向つて、日本の攻擊計畫を具して獻策したといふのも是れまた敵の裏をかいた一計略で、クロパトキンが反對の防禦計畫を立てゝ失敗したのは、中尉の不言の擧動がその功を奏したので、哈爾賓總攻擊の大勝利は、中尉の功勞が第一位を占めて居るのである、然らば、中尉の任務は哈爾賓攻擊で終つたかといふに、左樣でない、これは無論最初からその計畫ではあるが、クロパトキンが、己が那推に懲りて、爾來は中尉を眞の腹心として、萬事中尉に諮問する樣になつたのを幸、中尉は益々クロパトキンに取り入つて、間接に日本軍の利益を計る目的で、今度日本へ歸つて來たのも、無論日本人に對しても秘密であるがクロパトキ

ンに對しては、日本本國の樣子を探つて來るからといふ口實の下に戸間次長と倘今後の打合せをする爲め、及び今までに探り得た露國の秘密を報告する爲めに、哈爾賓攻擊のあつた日の翌日、支那人夫に紛れて、敵味方何れもの眼を眩まして來たのである、では、この日露戰爭が局を結んだら、中尉の任務が終るかといへば、矢張り左樣でない、まだ終らない、實をいへば、中尉の命のある限り、中尉は今の任務を續けねばならないのである。

併しこの計畫を實施する上に於て、最初次長は、その適任者を進むに就いて、非常の苦心を重ねたのである、この計畫は日清戰爭が濟んでから間もなく、次長がまた〇〇〇〇の職に居た時、今日の必要を既にその當時へ認めて、爾後十年近くも探し拔いて、去年の夏始めて、この駒井中尉を適任者として、秘密に拔擢し、且つ內意を含めて置いたのだ、といふに徵しても、如何に次長が人を得るに苦しんだが、また、如何に重大な任務であるか〻分る、そしてその人を得るに苦しむ譯といふのは

單に任務が重大であるばかりでなく、その人の境遇、殊に精神に重きを置いて、といふは、この任務は勞力に伴ふ報酬がない、即ち、如何に働らいても、金鵄勳章は愚か、本國の日本からは、國賊の名を受けて、而もその惡名は、自分の任務の續く限り、換言れば自分の命の終るまで、假令今度の戰爭は濟んでも、露國が全然亡びない限り、否、露國は亡びても世界の亡びない限り、永遠に雪ぐことの出來ない、も一つ換言れば、一は國家の体面上、餘り面白くない手段であること〻、一は今後各國の感情を害する憂患、寧ろ猜疑心を高めさせる疑懼あること〻に對して、永遠秘密の裡に葬つて了はねばならぬ、といふ任務に對して、當然自分の名譽をも、同じく永遠に亘つて犧牲に供するといふ、この苦痛を甘んじて、全く名譽利達の外に超然脫逸し、誠意唯だ君國の爲めに殉する覺悟あるの、眞の勇者でなければ、到底遂げ得らるべき任務でない、といふのが、困難の抑もなのである、所で、中尉はこの任務に甘んじて服したのであるから、今後は、永遠に露探の名を蒙りつ〻日本の

爲めに盡さねばならないので、隨つて、浪子も、藤右衛門も、露探に懇親を結んだといふ惡名は、是れまた永遠の拭ひ去ることが出來ないのである、また、參謀本部からの命令とあつて、浪子並に藤右衛門等に加へた束縛は、皆な掛札太尉の臨機の處置であつて、浪子の危險、即ち、繼母の壓迫と浪子の自殺とを防ぐ爲めの手段であつた、且つまた、この秘密は、浪子藤右衛門の兩人にも漏すべきではないが、兩人の中尉に對する關係、並にその人物を、大尉を通して知つた次長は、中尉の唯一の慰藉者としてこの浪子を娶らすべく、隨つて父子の快諾を得る爲めに、特に次長から、漏す樣にも命じたのである。

中尉は右の次第を語つて後。

『高山さん、斯ういふ譯ですから、貴下の名譽を恢復することの出來んのが、如何にも殘念ですが、また何とも申譯がないですが、是は國の爲めと諦めて戴いて、虫のいゝお願ひの樣ですが、この僕に藤右衛門を與へてはくれますまいか、浪子さんを娶

娶ればこそ僕は幸せです』

この時まで、單に俛首れて聞いて居たと思つた藤右衛門は、泣いて居たのだ、唇を嚙んで堪へて居たのだ、中尉の言葉が終るや共に、堪らず顏を抑へた、咽が塞つて、聲も思ふ樣には出ないを其を無理に絞り出して、

『駒井さんッ、も申譯がございませぬ、餘人なら知らぬこと、親類同樣にして戴いた私が、その私が、假令最初はお疑ぐり申さないにせよ、平常の御氣性も知つて居ながら、如何に世間の噂が高いからとて、迂濶に其を眞に受けて、如何に掛札さんのお言葉だからとて裏に裏ある道理を考へもせで、忠義なお方を捉へて、國賊、賣國奴よくもこの口が曲りませなんだ、駒井さんッ、どうぞ御勘辨を願ひますッ、また娘のことなら、私の方からお願ひ致します、不束女ではございますが、どうぞ末長く、ハイ、貴下の女房、妻といはせてやつて下さいませ、……お浪、お前は、親孝行女じやぞッ、幸福な奴じやッ、コレ、お禮を申せ、お禮をッ』

浪子は無論泣いて居たが、消ねて消えぬ夫の惡名、添つて添はれぬ我が薄命、悲喜交も迫つて、萬感胸に往來しながらも、消えぬ惡名には消えぬ光、添はれぬ緣には離れぬ情、思ひ返して座ろ嬉しく、

『駒井樣、お父樣、お嬉しう存じます』

右に、左に、斜に見上る淡紅の頰肉は柔毛に包む桃の色、父に、夫に、星と輝く感謝の眼には假の形を涙の女の誠、この頰この肉桃と共に紅褪せ香失せて地に落ち朽る時あるも、三世三千年をかけて變り乾かぬ徵の誠の涙の雨に培はれ、花の誠、女の誠、また萌え出る春の野邊に嬉しく咲き揃はで休まふかや。

小說　謀反人　終

謀反人
【正價　金貳拾五錢】

明治四十一年十月　日印刷
明治四十一年十月　日發行

著作者　井上雲嶺

發行者　岩崎鐵次郎
東京市神田區鍋町廿一番地

印刷者　木村榮吉
東京市京橋區采女町十番地

印刷所　文英社
東京市京橋區采女町九番地

著作權所有

發兌元　大學館
東京市神田區鍋町廿一番地
電話本局三〇六七番
振替貯金口座番號四五一七

押川春浪君著 (寫眞版挿入)
第一 世界怪奇譚 奇人の旅行 價廿五錢 郵稅四錢

二十世紀の膝栗毛は世界が舞臺である奇人あり其旅費百廿萬弗米國に鑛山王を驚かし太平洋に鑛露西亞を凹ましたる英國交際場裡に傍若無人の奇劇を演ず美人は駟る高花の襟は魂消え讃者亦一讃三嘆

押川春浪君著 (寫眞版挿入)
第二 世界怪奇譚 世界武者修行 價廿五錢 郵稅四錢

此の編節を分つ二十四冒頭の美人裳浴事件早く讃者の膽を奪ふ主人公國金藤次が如意棒を提げて世界大陸に巡行飛躍或は任俠或は蠻勇碧眼豚尾の膽玉を挫いて痛快壯絶

押川春浪君著 (寫眞版挿入)
第三 世界怪奇譚 空中大飛行艇 價廿五錢 郵稅四錢

未曾有の新發明空中大飛行艇は日本の理學士と獨逸の博士の手に依つて成り博士はこれを惡用して美人天空に飛ぶの椿事を惹起し巴里の全市の大問題となる理學士が義俠なる同志と共に捜索に向ふ壯絶雷神を驚し痛恨天女を呼ばしむ。

押川春浪君著 (寫眞版挿入)
第四 世界怪奇譚 怪人奇談 價廿五錢 郵稅四錢

眉目清秀の一青年、一妖婆が咒文の爲めに其姿を醜惡なる友人の姿と變ぜられて煩悶痛苦する事幾旬再び元の樣に回へる不思議なる話なり奇俠士は勇壯にして戰場の花は悲壯に共に婦女童幼の愛讃措かざるべきもの。

押川春浪君著 (寫眞版挿入)
第五 世界怪奇譚 魔島の奇跡 價廿五錢 郵稅四錢

航海王の大鑛脳船乘伯爵の初航海覺人島の俘人間生埋の法墓の底の殺人地球の極の黒山地底の美少年白髮の老人と九人の黒奴耶亡しの苦行片目と世界第一富豪羊に化けた人間美人域の驚歌燕舞空中電氣の作用三十二の金門人魚と幽靈の言葉航海王の歸國陸錄に『魔窟の三人』『暗夜の白刃』を添ふ。

押川春浪君著 (寫眞版挿入)
第六 世界怪奇譚 空中大飛行艇 價廿五錢 郵稅四錢

美人捜索に向ひたる空中大飛行艇の面々は瘴煙毒霧幾度か苦み猛獸蠻人の爲め屢々難に逢ひ遂に美人を取戻し惡博士武柄を誅し意氣揚々として歸來し巴里全市の大歡迎に局を結ぶ附錄として蕾薇嬢の行衛に就いて讃者よりの答案を附したれば興味更に深きものある可て。

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 第一編 冒險 九死一生 價廿五錢 郵稅四錢

支那の一娘子米國の一丈夫と契り、萬里の鵬程途に颶風に逢ひ娘子海中に沒す、丈夫失戀煩悶の餘決然として探險の途に上る、娘子海賊の慘禍に逢ひ牢獄に苦しみ深山林に毒蛇と戰ふ粒々辛苦備に嘗め遂に丈夫と邂逅しマラッカ國王に謁して間諜の嫌疑霽れ此に結縁の始めて全し。

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 第二編 探險小說 奇人の航海 價廿五錢 郵稅四錢

空前奇妙爆裂彈の發明者絶海の寶島に隱る、扶桑國の一士官海賊の巨魁の秘密箱を奪ひて寶島に萬里の波濤を蹴る士官一孤島の偉人に逢ひ具に發明の傳授を受け端艇に乘じてマダカスカルに到る談を緯とし此地に理學士の新發明屈折望遠鏡に依て、當て已に戀して海賊に捕はれ居る娘子の行衛を知り遂に奪れてこれを救ひ遂に階老を契る譚を綴とす。

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 第三編 冒險小說 新海底旅行 價廿五錢 郵稅四錢

青年と少嬢と相結盟し海底を占領して日本の版圖に編加へ金銀珠玉の珍寶採拾し千古の大偉勳を企つ或は鯨電魚に憑され、鮫に傷けられ、鰹族に苦しめられ、羽衣を被て敵軍の動靜を恫ひ、蛸群に困しみ國中に擒せられ千辛萬苦具に嘗めて終に素志を貫く。

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 第四編 冒險小說 月世界探險 價廿五錢 郵稅四錢

科學界の一大發明あり、月世界旅行機械これなり、未曾有の英傑と、絶世の美人と相携へて萬里大空に飛揚す其遭遇する危難、奇禍果して如何、怪事あり快擧あり、讃了一番、身は深渺として、天涯萬里の外にあらん、

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 第五編 冒險小說 奇人の魔法 價廿五錢 郵稅四錢

黑赤二個の狼を懷け數百の狼軍を指揮して生殺與奪を恣にする怪力容貌醜獰なる男美人に戀慕して無數の惡事をなし魔力の下に懊惱せる中に無邪氣の少女あり淫奔伯爵夫人あり、獰猛なる男爵あり靈魂忽ち体を換へ乍ら死し乍ら活く神變不思議想像以外の怪文字。

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 第六編 冒險小說 新ナポレオン 價廿五錢 郵稅四錢

乞食より帝王となりし英雄と、娼妓たる皇后と錯綜した物語、激戰あり、慘死あり、妖婆に誘拐さる、危禍あり大蛇に卷かれる裸美人あり、一攫萬金を得し快事あり、蠻地のナポレオンとして廢名、世界を震動するの事實

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 第七編 ◎冒險小說 船幽靈 價廿五錢 郵稅四錢

船幽靈とは何か、奇術を弄して海上に各國の船舶を惱め人を殺し財を掠む、世界各國驚愕恐慌水利の便殆んど絶し、我が碩學男兒これを憂ひ哲人、壯夫、相鬪つて帝國海上覇王の寶を奪けんとし二人の少女亦艱難辛苦單身敵地に入つて仁王的巨人と死生を爭ふ。

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 第九編 ◎冒險小說 生？死？ 價廿五錢 郵稅四錢

非凡の傑人あり、亞弗利加の天地を震撼す、妻？妹？絶世の佳人賊に苦しみ姉婦に惱む、一青年あり猛獸を友にして不思議の怪力あり、或は獅子に擯はれ、或は高山に迷ひ、毎殺あり、壓殺あり、扼殺あり、國と人との運命如何、誠むもの珍話と奇聞に駭目驚魂せずんばあらず。

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 第十編 ◎冒險小說 空中電氣旅行 價廿五錢 郵稅四錢

美人、月宮の中天に飛んで踪跡を失す、太陽に焚殺せられたるか、鷲鳥に攫去られたが生？死？東西南北査索して消息なし、こゝに於て空中電氣旅行の計畫あり、捜索家中、學者あり、少婦あり慘死あり、月世界探險を問題とすれば本書はこの解釋なり。

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 第十一編 ◎冒險小說 食人國探險 價廿五錢 郵稅四錢

屠殺あり、生埋あり、水火の責あり、大蛇の難あり、變境の怪人、毒手を逞ふして、年に月に害を被るもの幾百千人有志數人危險を冒し、生命を輕じ、鬼境に入り、妖地を殆んで、兇惡を感化し、犧牲をせんとす、代戰士果して成功したるや否や。

羽化仙史著 (寫眞版挿入)
冒險怪奇文庫 第十二編 ◎冒險小說 續食人國探險 價廿五錢 郵稅四錢

英雄あり、美人あり、烈婦あり、快男子あり、才子あり學者あり、幾度か生死の間に出入し、不毛の地をして見く旭日の恩に浴せしむ前編に優る壯快談。

乾坤獨歩著 (寫眞版挿入)
世界統一冒險譚第一編 ◎冒險小說 青年英雄團 價廿五錢 郵稅四錢

世界統一論起り志士の會合あり、日本のオ女俳優となつて巴里に聲價を博す忽ち西比利亞の牢獄に囚へられて事件急々錯綜す!!

乾坤獨歩著 (寫眞版挿入)
世界統一冒險譚第二編 ◎冒險小說 世界發展倶樂部 價廿五錢 郵稅四錢

倶樂部の總理は文武兼備の老練家、會員は多士濟々たり傑出せるは學殖深奥の青年と溫柔無慾の少女、眞にこれ双玉!!

乾坤獨歩著 (寫眞版挿入)
世界統一冒險譚第三編 ◎冒險小說 怪中の怪 價廿五錢 郵稅四錢

稀代の珍寶を探らんとし「人殺し谷」の兇賊と戰ひ前代未聞の人？獸を捕へ猿猴を研究し、億万の富を奪ひ美人才子壯士武人互に戰ふ。

乾坤獨歩著 (寫眞版挿入)
世界統一冒險譚第四編 ◎冒險小說 賊巢探險 價廿五錢 郵稅四錢

毒藥の採拾、羊羽の獵獲、意外の處に意外の兇手、父子の再會、思はぬ赤繩、本編の經緯、奇々怪々の文字!!

乾坤獨歩著 (寫眞版挿入)
世界統一冒險譚第五編 ◎冒險小說 キウリアス、アイランド 價廿五錢 郵稅四錢

新島出現して黃金測る可からず、探險の勇士美人沙漠を渡り象獵を試み、困難又困難功名果して誰れの手に落つ!!

乾坤獨歩著 (寫眞版挿入)
世界統一冒險譚第六編 ◎冒險小說 怪寶窟 價廿五錢 郵稅四錢

變地に入りて慘刑に遇ひ不思議の術、秘傳の妙藥に依て蘇る、奇怪習俗に苦しめられて屈せず勇士美人遂に大功を立つ

羽化仙史著 (寫眞版挿入)

◎冒險小說 百難旅行 價二十錢 郵稅四錢

一難去れば一難來り前門虎を防げば後門狼を迎ふ、幾度か窮に困み屢々災に遇ひ或は放浪、或は漂流、水火の巷に出入し劍戟の間に馳驅す、一少年が豪勇と義膽とは讀む者をして感憤興起せしめずんばあらず、寔にこれ冒險小說中の傑作。

加瀨花邦氏著 (寫眞版挿入)

◎モンゴリヤ妖怪村 價廿五錢 郵稅四錢

征露の役軍中より選まれて斥候として派遣せられたる三勇士が道を失ふてよりさま〳〵の怪事奇蹟に遭遇し或は虎に發ほれ妖怪を退治し幽靈と談じ危難に瀕し災厄に遇ひ途に戰死せしと思ほれし三勇士が恙なく歸つて大功を現はす快譚なり。

羽化仙史著 (寫眞版挿入)

◎奇女、無錢旅行 價廿五錢 郵稅四錢

一奇女あり容貌花の如く音聲玉を轉ずるが如し而も膽力遙に有丈男子を凌ぐ囊中一錢の貯ひなく英國、佛蘭西、獨逸、米國等歐洲大陸を跋渉し到る處奇談珍說の中心となる讀者幸に恍惚として自失せずんば幸なり、

押川春浪君著 (寫眞版挿入)

◎世界奇拔譚第一編 新アラビヤンナイト 價廿五錢 郵稅四錢

「アラビヤンナイト」は天下の奇書にして苟くも小說を作るもの〻一讀せざる事なし本書はステヴエンソンの原書を基として著者が例の豐富なる思想を流暢なる筆を以て綴りたるもの、趣味遙に「アラビヤンナイト」の上にあり。

押川春浪君著 (寫眞版挿入)

◎世界奇拔譚第二編 ヘーグ奇怪塔 價廿五錢 郵稅四錢

奇怪塔あり、大戰亂を醸し、勇士の最期に及び黑百合花の發明となり、空前の大懸賞となり、將軍の幽靈を顯出するの奇譚を經とし、絕世の美人が勇俠を緯とす原書は歐洲大評判の小說更に著者の奇想を加へ麗筆を振ふて此の編成る以て本書の趣味を知る可し。

押川春浪君著 (寫眞版挿入)

◎世界奇拔譚第三編 立身膝栗毛 價廿五錢 郵稅四錢

那翁が佛國の皇帝となりし時、玉座の前に來りし一少年こそ本編の主人公にて、其後那翁の批評の言に勵まされて、偉大の人物となりしや否やは彼れが運命の駒に跨つて奇なる人生の長旅を試みし所の物語、山あり、河あり、美人あり、號城あり、その面白き事恰も武者修行が世界各國を經廻り千變萬化の奇事に遭遇すると異ならず。

米國 ミス、マロック瓊原著
三浦天民君譯 (寫眞版挿入)

◎新空中旅行 價廿五錢 郵稅四錢

一王國の王子が王位に即き攝政の叔父のために一孤塔の中に幽閉せられしに王子の降誕當時より不思議なる老婆顯はれ此に王子のために或は雲霓となり或は鑑鏡切れなり智識を增さしめ空中を飛行する等自在なる神通を與へ王子に故郷を眺めしめて自分を自覺せしめ遂に王位に還ると云ふ不思議なる少年小說なり。

押川春浪君著 (寫眞版挿入)

◎航海奇譚 價廿五錢 郵稅四錢

大洋と言ふ己に快也、航海と言ふ己に壯也、奇譚といふに至つては已に競ふて讀まざる能はず、大平洋を馳る船大西洋に沈む船、甲板に起りたる神出鬼沒の活劇、奇絕にして趣味多く快絕にして感興甚だし。

目次 海上の怪、孤島の奇遇、幽靈島、海の奇蹟人、軍士官、無名の碑、俠血二人男兒、二人胡弓師、海

鐵脚子著 (寫眞版挿入)

◎奇談貧乏旅行 價廿五錢 郵稅四錢

囊中の空乏は辻堂に一泊して地獄の慘悲を感し橋錢を誤寃化して旅の憂さを悟り愈々進みて愈々究し愈々究して愈々勇を得此に於てか奇談百出珍話續々として湧く一讀柔弱男子の懶眠を覺醒するに足るものあり。

宮崎來城君著 (寫眞版挿入)

◎無錢旅行 價廿五錢 郵稅四錢

旅行の面白味は汽車に在らず、汽船に在らず、馬に在らず、車に在らず、所謂徒步無錢にして千山萬壑を跋涉するに在り、風を餐ひ露を飲み乞食と合宿するなど辛苦の中に忘られぬ趣味の存するものあり、此書世に出でゝ忽ち十數版を重ねたり以て如何に壯快なる讀物なるを知れ

鐵脚子著 (寫眞版挿入)

◎野宿旅行 價廿五錢 郵稅四錢

汽車の便を捨て自轉車の捷を藉らず膝栗毛に鞭つて三個の風來漢が到る處に滑稽を演じ失笑を惹起し、而も豪放磊落一難に逢ふ毎に愈々勇を增し雷天井に草枕天地の寂寞を破る胴羅聲は恐ひ來る數萬の蚊軍を退却せしめ一瓶の正宗に微醉機嫌往來狹しと大手を振つても流石野道の呑氣此上もなき一讀噴飯滑稽無比の旅行記なり

宮崎來城君著 (寫眞版挿入)

◎乞食旅行 價廿五錢 郵稅四錢

腹に萬卷の書を貯へながら旅行のしたさに鉄椀を片手に乞食の仲間入して彼處此處と經廻くつた實歷談である、二日したら止めらしわといふ乞食の境遇ほどんなものであらうか來城氏の無錢旅行を讀んだ人はそゝ意味の多い事を悟るであらう。

- 平井周南君著 滑稽大寄席 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵税四錢
- 嫌苦樓千萬著 滑稽落語集 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 宮崎來城君序 軒渠道人著 大笑百話 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 櫻川老禪著 頓智百話 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 哄笑子著 滑稽大集會 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 可笑樓客樂著 滑稽大笑種本 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 甘蔗子著 放ゝ屁百話 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 機嚢子著 軍人頓智叢談 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 笑門福來著 滑稽落語珍話會 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 蕪雀樓醉客著 西洋笑話五百珍 (寫眞版挿入) 價十八錢 郵税四錢
- 野狐狂禪著 一休和尚頓智笑話 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 天籟居士著 大久保彦左衛門笑話 (寫眞版挿入) 價十八錢 郵税四錢
- 南圖生著 曾呂利新左衛門笑話 (寫眞版挿入) 價十八錢 郵税四錢
- 圖書狂生著 大岡越前守頓智談 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 尾花庵二十主坊著 水戸黄門奇行談 (寫眞版挿入) 價十八錢 郵税四錢
- 尾花庵二十主坊著 大笑下女百話 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 年期小僧與太郎著 大笑小僧百話 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵税四錢
- 十返舍一九著 尾花庵二十坊主撰 東海道膝栗毛 價十八錢 郵税四錢
- 十返舍一九著 尾花庵二十坊主撰 續東海道膝栗毛 價十八錢 郵税四錢
- 十返舍一九著 尾花庵二十坊主撰 金毘羅宮島膝栗毛 價十五錢 郵税四錢

- 十返舍一九著 尾花庵二十坊主撰 木曾街道膝栗毛 價十八錢 郵税四錢
- 十返舍一九著 尾花庵二十坊主撰 續木曾街道膝栗毛 價十八錢 郵税四錢
- 十返舍一九著 尾花庵二十坊主撰 木曾街道歸り道 (寫眞版挿入) 草津温泉膝栗毛 價十五錢 郵税四錢
- 十返舍一九著 尾花庵二十坊主撰 奥羽道中膝栗毛 價十八錢 郵税四錢
- 十返舍一九著 尾花庵二十坊主撰 續奥羽道中膝栗毛 價十八錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 滑稽小説 (寫眞版挿入) 道樂和尚 價廿五錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 滑稽小説 (寫眞版挿入) 空ゝ想病 價廿五錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 滑稽小説 (寫眞版挿入) 自惚れ男 價廿五錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 (寫眞版挿入) 滑稽新婚旅行 價廿五錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 (寫眞版挿入) 續滑稽新婚旅行 價廿五錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 (寫眞版挿入) 滑稽女學生旅行 價廿五錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 (寫眞版挿入) 續滑稽女學生旅行 價廿五錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 (寫眞版挿入) 滑稽東京見物 價廿五錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 (寫眞版挿入) 學生生活 滑稽遊學 價廿五錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 (寫眞版挿入) 滑稽豪傑書生 價廿五錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 (寫眞版挿入) 滑稽女官吏 價廿五錢 郵税四錢
- 早田玄洞君著 (寫眞版挿入) 膽力修行 價廿五錢 郵税四錢
- 天涯歸客著 (寫眞版挿入) 立志冒險 北米無錢渡航 價廿五錢 郵税四錢
- 五峰仙史著 (寫眞版挿入) 歸省旅行 價廿五錢 郵税四錢

五峰仙史著 抱腹噴飯 **滑稽旅行** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

五峰仙史著 奇談洋行 **世界滑稽旅行** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

報知新聞連載 松林伯知講演 **太閤榮華物語**(春の卷) (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

報知新聞連載 松林伯知講演 **太閤榮華物語**(夏の卷) (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

報知新聞連載 松林伯知講演 **太閤榮華物語**(秋の卷) (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

報知新聞連載 松林伯知講演 **太閤榮華物語**(冬の卷) (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

報知新聞連載 松林伯知閲 松林伯龍演 **蒙古軍記** (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅六錢

報知新聞連載 松林伯知閲 松林伯龍演 **蒙古軍記**(後編) (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅六錢

三宅青軒君著 小說武士道 **武道の神** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 小說武士道 **續武道の神** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

東京二六新聞連載 三宅青軒君著 小說武士道 **土手の道哲** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

東京二六新聞連載 三宅青軒君著 小說武士道 **續土手の道哲** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

東京二六新聞連載 三宅青軒君著 小說武士道 **女忠臣藏** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

東京二六新聞連載 三宅青軒君著 明治豪傑 **今樣水滸傳** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

東京二六新聞連載 三宅青軒君著 豪傑小說 **鳥さし膽助** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

東京二六新聞連載 三宅青軒君著 豪傑小說 **續鳥さし膽助** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 豪傑小說 **喜劍** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 豪傑小說 **續喜劍** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻巷君著 俠骨小說 **快男兒** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻巷君著 俠骨小說 **續快男兒** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

東京二六新聞連載 三宅青軒著 豪傑小說 **我太郎** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

東京二六新聞連載 三宅青軒著 豪傑小說 **續我太郎** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻巷君著 探奇小說 **野原の怪邸** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

萬朝報連載 三宅青軒君著 探奇小說 **不思議の娘** (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

曉風山人著 怪奇小說 **秘密の怪洞**

鹿島櫻巷君著 義勇小說 **世界の秘密國** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻巷君著 チベット探險 **無底湖の秘密** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻巷君著 チベット探險 **不死の靈窟** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

正岡藝陽君著 冒險奇談 **孤島の秘密** (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

正岡藝陽君著 冒險奇談 **續孤島の秘密**

雨酒舍主人譯 探奇小說 **怪僧** (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

京北隱士著 探偵小說 **二人令孃** (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

加賀花邦君著 探險小說 **ペタゴニヤ仙窟** (寫眞版挿入) 價十八錢 郵稅四錢

鹿島櫻巷君著 探奇小說 **美人島探險** (寫眞版挿入) 價十八錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 探奇小說 **幽靈の寫眞** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

河越輝子女史著 怪奇小說 **美人怪** (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

押川春浪君著 冒險奇談 **千年後の世界** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

東京二六新聞掲載懸賞小說 探偵小說 **女優殺し** (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

羽化仙史著 怪奇小說 **嫗の一生** (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

嘘病古武士著 眞說 **妖怪新百話** (寫眞版挿入) 價十五錢 郵稅四錢

- 新歸　篠原嶺葉君著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢
- 不如歸　篠原嶺葉君著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢
- ハイカラ令嬢　篠原嶺葉君著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢
- 續ハイカラ令嬢　篠原嶺葉君著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢
- 可憐嬢　篠原嶺葉君作　家庭小說　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢
- 續可憐嬢　篠原嶺葉君作　家庭小說　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢
- 戀の妻　篠原嶺葉君著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢
- 續戀の妻　篠原嶺葉君著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢
- 戀の緣　花園小史著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 貞か不貞か婦　無名氏著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢
- 戀の人夫　草の人著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 人生の行路　草の人作　家庭小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 女天一坊　廣津柳浪君序　有本天涙君著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 戀の罪　草の人作　家庭小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 戀か夢か　草の人作　戀愛小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 女心　草の人著　戀愛小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 戀の一年半有　池田錦水君著　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 女學生氣質　河村扶桑君著　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 新婚百話　井上九磯君著　花婿花嫁　（寫眞版挿入）　價二十錢　郵稅四錢
- 武士道百話　河村扶桑君著　（寫眞版挿入）　價十五錢　郵稅四錢
- 明治六十大臣　長田偶得君著　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢

- 大臣の書生時代　墨堤隱士著　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢
- 食客　矢野滄浪君著　（寫眞版挿入）　價二十錢　郵稅四錢
- 無錢修學　池田錦水君著　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 人物の食客時代　墨堤隱士著　青年立志　（寫眞版挿入）　價十八錢　郵稅四錢
- 豪商の雇人の時代　墨堤隱士著　商人立志　（寫眞版挿入）　價十五錢　郵稅四錢
- 英雄の道樂　西山筑濱君著　品性修養　（寫眞版挿入）　價二十錢　郵稅四錢
- 夜の女界　桐友散士著　暗面奇觀　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 明治娘評判記　翠面散士著　社會各面　（寫眞版挿入）　價二十錢　郵稅四錢
- 木賃宿　原田東風君著　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 奥樣と孃樣　池田錦水君著　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 婦人と戀愛　池田錦水君著　（寫眞版挿入）　價二十錢　郵稅四錢
- 戀の解剖　池田錦水君著　境遇各面　（寫眞版挿入）　價二十錢　郵稅四錢
- 戀の婦人氣質　池田錦水君著　社會各面　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅四錢
- 女心の解剖　池田錦水君著　社會各面　（寫眞版挿入）　價三十錢　郵稅六錢
- 妖怪奇談　長田偶得君著　（寫眞版挿入）　價十五錢　郵稅四錢
- 新婦の秘密　篠原嶺葉君著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 深山の夫婦　草の人作　家庭小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 理想の妻　草の人作　家庭小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 新家庭　草の人作　家庭小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢
- 戀の果　須藤寒泉君著　家庭小說　（寫眞版挿入）　價廿五錢　郵稅四錢

生田葵山人著 小說家庭 貴族の戀人 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

羽化仙史著 小說家庭 財婚夫人 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

篠原續葉君著 小說家庭 妾腹華族 (寫眞版挿入) 價參拾錢 郵稅四錢

篠原續葉君著 小說家庭 續妾腹華族 (寫眞版挿入) 價參拾錢 郵稅四錢

篠原續葉君著 探險小說 立志兄弟 (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

篠原續葉君著 探險小說 續立志兄弟 (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

逆川櫻主人著 小說家庭 露子軍 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

福田學月生著 滑稽小說 憶將軍 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

曉風山人著 滑稽小說 虎の命 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

羽化仙史著 怪奇小說 薄美人 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

府南隱士著 怪奇小說 新クレオパトラ (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

府南隱士著 怪奇小說 續新クレオパトラ (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

羽化仙史著 怪奇小說 モデル姫 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻巻君著 探奇小說 變裝の怪人 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

羽化仙史著 冒險小說 北極探險 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

松林伯知講演 一休禪師 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

松林伯知口演 續一休禪師 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

大阪時事新報掲載 奈良屋左衛門豪遊奇談 (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

池田夕汀女史著 家庭小說 一人妻 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

篠原續葉君著 家庭小說 ハイカラ夫婦 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

篠原續葉君著 小說家庭 新婚旅行 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

篠原續葉君著 小說家庭 未來の妻 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

草の人作 小說家庭 戀人生き (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

白蓮庵荔舟著 小說人生 若き時旅 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

草の人作 小說家庭 戀の戀 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

草の人作 小說家庭 捨てたる戀 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

羽化仙史著 怪奇小說 活幽靈 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

羽化仙史著 怪奇小說 怪髑髏 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

羽化仙史著 探奇小說 舊情婦 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻巻君著 怪奇小說 秘密島 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

雨廼舍主人譯 怪奇小說 死人ケ濱 (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

雨廼舍主人譯 怪奇小說 續死人ケ濱 (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

篠原續葉君著 家庭小說 糟糠の妻 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

篠原續葉君著 家庭小說 夫えらみ (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

篠原續葉君著 家庭小說 妻えらみ (寫眞版挿入) 氣三十錢 郵稅四錢

篠原續葉君著 家庭小說 嫁こ姑 (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢

大木臥葉合作 吉野臥城 家庭小說 處女の秘密 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

千葉天舞君著 家庭小說 浮氣の罪 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

田中桃葉君著 家庭小說 未亡人 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻巻君著 英雄小說 冒險武士 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

- 宮崎來城君 小說カラ 餓鬼大將 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 宮崎來城君 小說カラ 校臣學 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 宮崎來城君 小說カラ 自力學人 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 池田錦水君 小說カラ 天遊術 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 男子醫戒 女性の魔人會 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 羽化仙史 怪奇小說 死人の再戀空 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 月露行客君 探奇小說 冒險奇妄談 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 小原夢外君 青年小說 破れ (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 濁水漁郎 戀愛小說 色情即是と (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 千葉天舞君 家庭小說 妻 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
- 神山峻峻君 西洋怪奇講談 (寫眞版挿入) 價十五錢 郵稅四錢
- 東遊隱士 明治豪傑 滑稽抱腹談 (寫眞版挿入) 價十八錢 郵稅四錢
- 五峰仙史 滑稽小說 老書生 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 五峰仙史 滑稽小說 女教師 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 五峰仙史 滑稽小說 ハイカラ新家庭 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 五峰仙史 滑稽小說 若夫婦 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 五峰仙史 滑稽小說 我輩ハ小僧デアル (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 彩法師 滑稽寫生 我輩ハ鼠デアル (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢
- 田中桃葉君 家庭小說 婿えらみ (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢
- 千葉天舞君 家庭小說 ハイカラ田舍娘 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 萩江梅夫人 家庭小說 戀の行末 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 羽化仙史 冒險小說 海底奇談 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

- 中村兵衛君 秘密小說 魔の池 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 北島春石君 家庭小說 姉妹の秘密 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 菊地曉汀君 家庭小說 悲戀悲歌 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 翠波女史 家庭小說 貧しき嬢 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 吉野臥城君 家庭小說 もつれ綠 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 吉野臥城君 大木臥巢君合作 立志小說 獨立獨行 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 日野荔舟君 青年小說 女難 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 日野荔舟君 人生小說 人の運命 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- リットン卿原著 抱花生譯 愛國小說 魔法修行者 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 松林伯知講演 一休禪師續編 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 松林伯知講演 黑田騷動實記 (寫眞版挿入) 價三十錢 郵稅四錢
- 報知新聞連載 邑井一講演 忠孝談 佐野の鉢木 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 五峰仙史 滑稽 自由結婚 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 篠原嶺葉君 家庭小說 後の新不如歸 (寫眞版挿入) 價參拾錢 郵稅四錢
- 羽化仙史 冒險小說 海賊女王 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 羽化仙史 冒險小說 海賊船 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 羽化仙史 冒險小說 男裝の奇女 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 鹿島櫻巷 冒險小說 怪島探險 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 羽化仙史 冒險小說 難行苦行 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢
- 羽化仙史 冒險小說 南極探險 (寫眞版挿入) 價廿五錢 郵稅四錢

- 探險小說 **秘密航海** 島樓著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 奇談 **遠征蠻島の日本少女** 星塔小史述（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 奇談 **成効熱血男兒** 星塔小史述（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **怪奇海洋の奇怪** 日野荔舟君著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **探奇地獄村** 雨迺舍主人著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **家庭母の罪** 小原夢外君著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **探奇志士の戀** 中村兵衛君著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **專賣心中僧** 中村兵衛君著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **冒險伏魔殿** 羽化仙史著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **冒險女神男** 羽化仙史著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **冒險怨靈** 羽化仙史著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 奇談 **寬永御前試合** 松林伯知講演（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **英雄菊水吉** 三宅青軒君著（寫眞版挿入） 價三十錢 郵稅四錢
- 小說 **英雄菊水正吉後編** 三宅青軒君著（寫眞版挿入） 價三十錢 郵稅四錢
- 小說 **探奇死骸館** 小原夢外君著（寫眞版挿入） 價三十錢 郵稅四錢
- 小說 **怪異たぬき寺** 中村兵衛君著（寫眞版挿入） 價三十錢 郵稅四錢
- 小說 **氷原行旅** 井口柴濤君著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **怪奇女夫** 日野荔舟君著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 奇談 **絲カラ奇旅行** 星塔小史著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢

- 小說 **怨の戀** 篠原嶺葉君著（寫眞版挿入）
- 小說 **怨の戀後編** 篠原嶺葉君著（寫眞版挿入）
- 小說 **寂しさ女** 愛波逸人著（寫眞版挿入）
- 小說 **心の鬼** 遠藤柳雨著（寫眞版挿入）
- 小說 **妻えらみ** 篠原嶺葉君著（寫眞版挿入）
- 小說 **野分** 千山樓主人著（寫眞版挿入）
- 小說 **家庭の波** 三島霜川著（寫眞版挿入）
- 小說 **夫婦心中** 無名氏著（寫眞版挿入）
- 小說 **虛榮の令孃** 齋藤吊花著（寫眞版挿入）
- 小說 **糟の妻** 篠原嶺葉君著（寫眞版挿入） 價參拾錢 郵稅四錢
- 小說 **華族の娘** 三島霜川著（寫眞版挿入） 價參錢 郵稅四錢
- 小說 **不運の娘** 三島霜川著（寫眞版挿入） 價參拾錢 郵稅四錢
- 小說 **親不知** 無名氏著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **毘沙門丸** 千山樓主人著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **美少年** 宮地竹峰著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 小說 **苦學團** 立志竹峰著（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 講談 **紅皿缺皿** 神田伯海講演（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
- 奇談 **左甚五郎** 神田伯鱗講演（寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢

258
907

- 星塔小史著 怪奇談 人鐵火（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 中村兵衛君著 怪異小說 蛇屋敷（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 星塔小史著 探奇小說 片脚の怪人（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 遠藤柳雨著 冒險小說 志士と佳人（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 羽化仙史著 冒險小說 人か鬼か（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 逆水生著 青年小說 處世難（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 三宅青軒君著 俠骨小說 烈婦勝山（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 三宅青軒君著 俠骨小說 烈婦勝山後編（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 滝江不鳴著 怪談小說 死靈の崇（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 滝江不鳴著 怪談小說 新七不思議（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 滝江不鳴著 怪談小說 鬼女の姿（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 三宅青軒君著 豪傑小說 富士八郎（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 三宅青軒君著 豪傑小說 富士八郎後編（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 星塔小史著 武俠小說 蠻カラ奇男兒（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 五峰仙史著 滑稽食客先生（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 五峰仙史著 滑稽貧乏華族（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 五峰仙史著 滑稽三大夫（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢
- 五峰仙史著 滑稽お三どん（寫眞版挿入）價廿五錢 郵稅四錢